

東京都スポーツ推進総合計画の改定について

資料目次

1. 現行計画策定後の、都のスポーツを取り巻く環境や社会状況の変化について
2. 現行計画期間中の主な取組とスポーツ実施率の推移について
3. 現行計画で掲げた各指標の推移、今後の課題・施策の方向性等について
(政策目標 1 ～ 3)
4. 次期計画で取り扱う「スポーツ」の範囲について
5. 次期計画の方向性（基本的な考え方）について
6. 計画改定のスケジュール（予定）について

1. 現行計画策定後の、都のスポーツを取り巻く環境や社会状況の変化について

2018年3月

東京2020大会の開催決定などを受け、当時の「東京都スポーツ推進計画」及び「東京都障害者スポーツ振興計画」を統合し、「東京都スポーツ推進総合計画」を策定
計画期間：2018年4月～2025年3月

2019.9 ラグビーワールドカップ2019™開催

新型コロナウイルス感染症の発生

2020～

新型コロナウイルスの影響により、スポーツを始めとした様々な活動が制限される（イベント自粛、無観客開催、入場制限等）

2020.3 東京2020大会の1年延期が決定

2021.7～ 東京2020大会開催（原則無観客）

2022.1 TOKYOスポーツ
レガシービジョン策定

2022.3 第3期スポーツ基本
計画策定（国）

■ 様々なレガシーの創出
・アーバンスポーツやパラスポーツへの関心の高まり
・ボランティア文化の定着
・新規恒久施設の整備 など

2022.7、9 世界陸上、デフリンピック開催決定

2023.5

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行、各種スポーツ大会、イベントの再開

2023.7 TOKYO2020レガシーレポートの策定

計
画
期
間
（
7
年
間
）

計画期間中における様々な社会状況の変化

人口減少、少子高齢化の加速

- ・スポーツに参画する者の減少
- ・スポーツの担い手の不足
- ・地域におけるスポーツ環境の維持が困難となる可能性
- ・地域コミュニティの衰退
- ・高齢化の進展に伴う健康志向の高まりと医療費総額の上昇

子供のスポーツ離れ

- ・子供の総運動時間の減少
- ・子供の体力低下、肥満度の上昇
- ・子供の運動を取り巻く環境の変化（遊びの多様化、不活発な生活習慣の定着など）
- ・経済格差によるスポーツ体験格差

新たなスポーツ活動などの登場

- ・アーバンスポーツ、ニュースポーツ、レクリエーションスポーツ、eスポーツといった多種多様な活動の登場

スポーツ・インテグリティ向上の必要性

- ・スポーツ団体のガバナンス強化やコンプライアンス推進
- ・指導時の暴力根絶や、ハラスメント防止

DX、AIなどの技術革新

- ・VR・ARを活用した新たなスポーツの楽しみ方
- ・データ分析によるアスリートのパフォーマンス向上、指導ではなく動画視聴による練習の実施
- ・AIによる健康関連などビッグデータの解析・活用
- ・運動場所の変容（自宅での運動の増加）

多様化の進展

- ・性自認など個人の価値観を尊重する意識の高まりや、共生社会の実現に向けた機運の高まり
- ・都内在住の外国人の増加
- ・テレワークの浸透やオンライン化（非対面）によるライフスタイル、働き方の多様化

環境問題・気候変動の深刻化

- ・熱中症による救急搬送
- ・猛暑による、相次ぐ試合中止や延期など、気候変動の深刻化によるスポーツ実施への影響が顕著に

2025年3月



上記の様々な状況変化を踏まえながら、東京2020大会後の都のスポーツ行政の羅針盤となる計画へ改定を行う
計画期間：2025年4月～2031年3月（案）

2. 現行計画期間中の主な取組とスポーツ実施率の推移について

現行計画期間中の主な取組・成果

○「健康長寿の達成」、「共生社会の実現」、「地域・経済の活性化」の3つの政策目標のもと、スポーツ振興審議会でも意見を賜りながら、関係各局と連携し、202の事業を実施

⇒ 計画策定時と比べ、都におけるスポーツの状況は大きく進展

政策目標	取組・成果
<p>政策目標01 健康長寿の達成</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 都民へのスポーツ情報の発信 スポーツに関する多面的な情報発信を行い、スポーツ情報に触れる機会を提供 〔R4実績：スポーツTOKYOインフォメーション ビュー数1,353,293回/年、障スポナビ ビュー数239,375回/年、パラスポーツスタートガイド ビュー数218,403回/年〕 ● ウォーキングイベント「TOKYOウォーク」の開催 都民の健康づくりに向け、誰でも気軽に参加できるウォーキングイベントを開催 〔R4実績：参加者数 3,515人〕 ● 区市町村が実施する、スポーツイベントやスポーツ環境整備等への支援 スポーツ実施率やパラスポーツの関心度向上に資する区市町村の事業に対して補助を実施 〔R4実績：地域スポーツ推進(44地区132事業)、パラスポーツ推進(42地区114事業)〕  <p>スポーツTOKYOインフォメーション</p>
<p>政策目標02 共生社会の実現</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 参加・体験型障害者スポーツイベント「チャレスポ！ TOKYO」の開催 障害者がスポーツを始めるきっかけを提供するとともに、障害のある人とない人が、スポーツを通じて相互に交流する機会を提供 〔R4実績：参加者数 約1,000人〕 ● 「TEAM BEYOND」を活用した魅力発信 パラスポーツの魅力や見どころを継続的に発信するとともに、障害の有無を問わず、広く都民等が参加する大会やイベントを開催 〔R4実績：都民等が参加できるポッチャ大会 一般参加40チーム〕 ● 都立特別支援学校活用促進事業 障害のある人や障害者スポーツ団体等が、身近な地域でスポーツ活動ができるように体育施設を貸出。障害の有無に関わらず誰もが参加できる体験教室を開催。 〔R4実績：貸出事業対象校 29校、体験教室 127回〕 ● 「シニア健康スポーツフェスティバルTOKYO」の開催 59歳以上の方が参加するシニアのスポーツ大会を開催 〔R4実績：参加者数 2,340人〕  <p>車いすバスケットボール体験教室</p>

2. 現行計画期間中の主な取組とスポーツ実施率の推移について

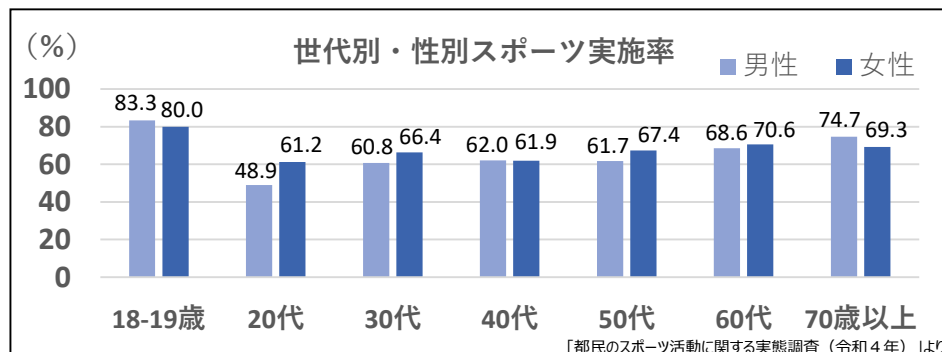
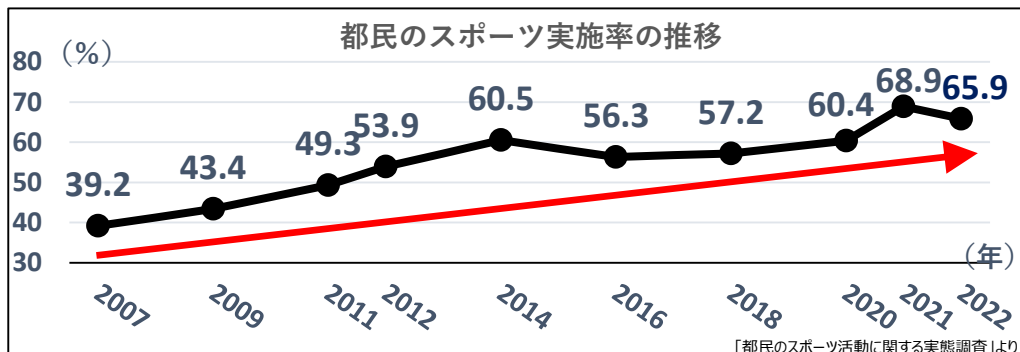
政策目標	取組・成果
<p>政策目標03 地域・経済の活性化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● GRAND CYCLE TOKYO レインボーライド 環境にやさしく、健康にもよい自転車で、レインボーブリッジや海の森トンネルを駆け抜けるイベントを開催 〔R4実績：参加者 約8,000人（スポーツ体験イベント含む）〕 ● 「東京マラソン」の開催 「する・みる・支える」全ての人が一いつになり、東京のスポーツ振興に寄与する世界最高峰のマラソン大会を開催 〔R4実績：定員 38,000人〕 ● 様々なスポーツ大会への都民招待 大規模スポーツ大会等やプロスポーツチーム等が主催する試合への都民招待等によるスポーツ観戦機会の創出 〔R4実績：スポーツ観戦事業 23件、パラスポーツの観戦会の実施（TEAM BEYOND）5回〕 ● スポーツ推進企業認定制度 従業員のスポーツ促進やスポーツ支援に取り組む企業等を「東京都スポーツ推進企業」として認定し、認定企業の社員のスポーツ活動を推進する取組や、スポーツ分野における社会貢献活動に関し、ホームページ等で情報発信を実施 〔R4実績：認定企業 366社〕



GRAND CYCLE TOKYO レインボーライド

スポーツ実施率の推移

都民のスポーツ実施率は、着実に上昇しており、2022年度は、現行計画を策定した2018年度の57.2%から8.7ポイント増となる65.9%であった。目標値である70.0%にはまだ届いていないため、引き続き、各種スポーツ大会の開催によるスポーツ気運の醸成や、身近な運動機会の提供等により、更なる数値の向上と長期的な上昇傾向を維持・達成していく必要がある。



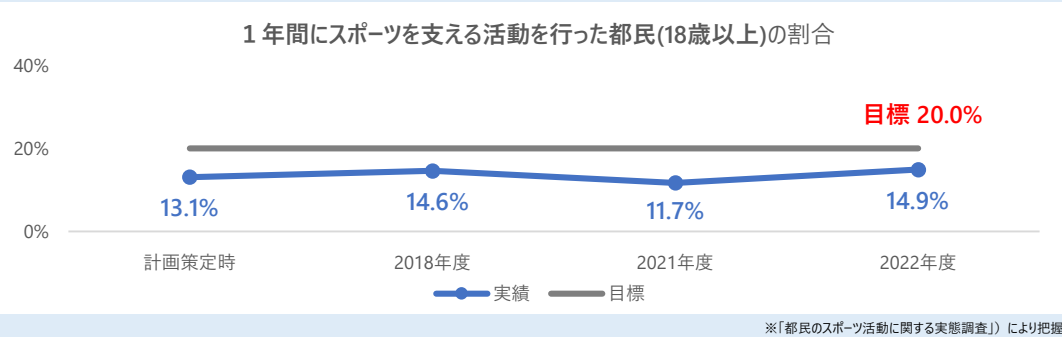
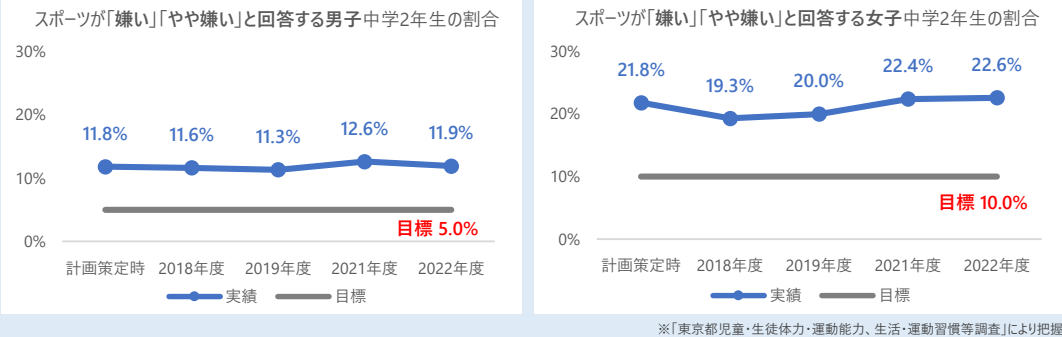
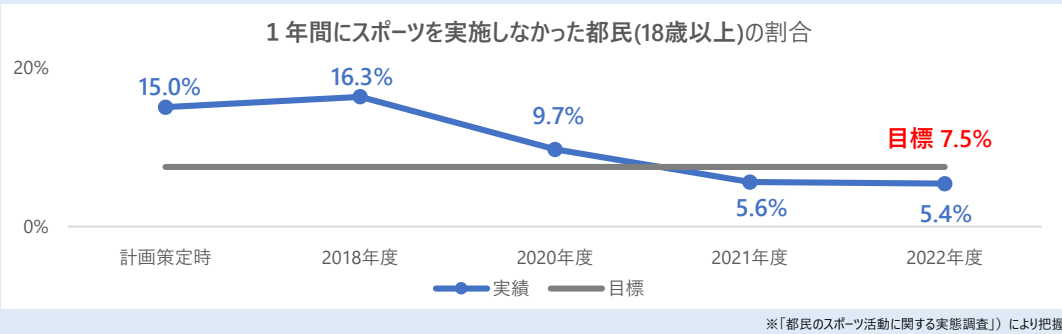
※全国数値：52.3%（令和4年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（スポーツ庁）より）

3. 現行計画で掲げた各指標の推移、今後の課題・施策の方向性等について（目標1）

○都民の心身の健康を維持・増進させていくために、効果的なスポーツを継続的に実施してもらうことなどを目的として設定した指標

目標1…スポーツを通じた健康長寿の達成

指標の達成状況



課題・方向性等

- ✓ 2022年度の、1年間にスポーツを実施しなかった都民の割合は**目標値7.5%**に対して**5.4%**と指標を達成した。
- ✓ 引き続き、取り組みやすい運動の紹介など、スポーツの敷居を下げる取組により、スポーツ非実施層へのアプローチを進めるとともに、継続してスポーツに取り組める環境の整備を図っていく。

- ✓ 2022年度にスポーツを「嫌い」「やや嫌い」と回答した中学2年生の割合は、男子で**目標値5.0%**に対して**11.9%**、女子で**目標値10.0%**に対して**22.6%**であった。
- ✓ 生涯を通じてスポーツに親しむ都民の増加に向け、学齢期から運動習慣を身に付けさせ、男子・女子ともにスポーツ好きを増やしていくことが必要である。

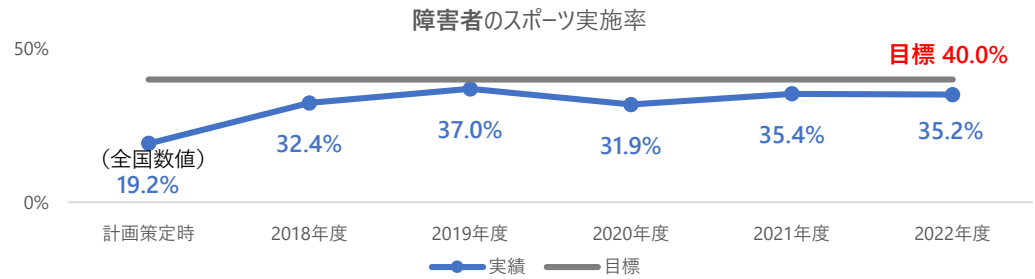
- ✓ 2022年度にスポーツを支える活動を行った都民の割合は、**目標値20%**に対して**14.9%**であった。
- ✓ コロナ禍での落ち込みから復調傾向にあるものの目標値には達しておらず、引き続き情報や機会の提供、研修会の開催などにより、ボランティアや指導者など支える人材の増加や質の向上を図っていく。

3. 現行計画で掲げた各指標の推移、今後の課題・施策の方向性等について（目標2）

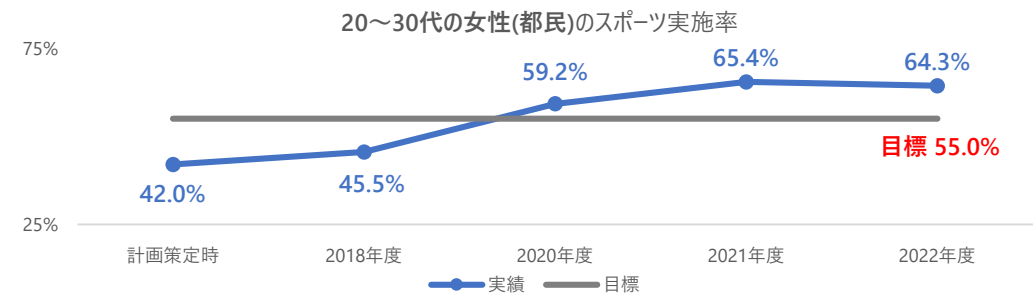
○共生社会の実現に向け、都民にそれぞれの体力や身体能力に応じてスポーツを楽しんでもらうことを目的として設定した指標

目標2…スポーツを通じた共生社会の実現

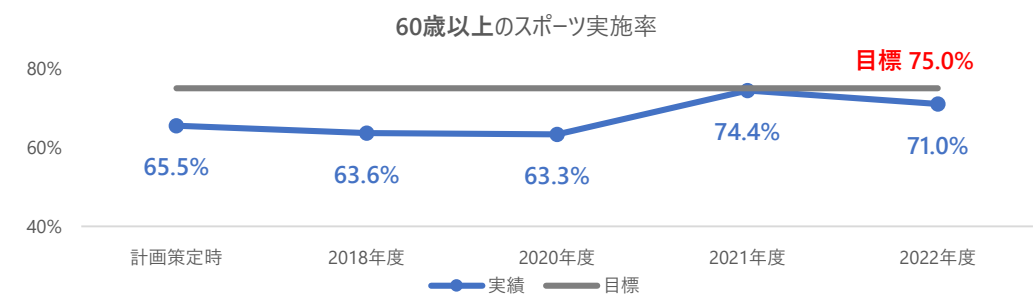
指標の達成状況



※【～2017年度】スポーツ庁「地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）」により把握
【2018年度～】「障害者のスポーツに関する意識調査」により把握



※「都民のスポーツ活動に関する世実態調査」により把握



※「都民のスポーツ活動に関する実態調査」により把握

課題・方向性等

- ✓ 2022年度の障害者のスポーツ実施率は目標値40.0%に対して35.2%であった。コロナ禍前(2019年)の37.0%には至らないものの回復傾向にある。
- ✓ 運動していない人や、継続したい人が取り組みやすい環境整備を多面的に展開していく必要がある。

- ✓ 2022年度の20～30代の女性のスポーツ実施率は目標値55.0%に対して64.3%と指標を達成した。
- ✓ 働き盛り世代については、男女間で実施率に差が生じているため、男性も含めた世代全体での底上げが必要である（男性20代48.9%、30代60.8%、女性20代61.2%、30代66.4%）。

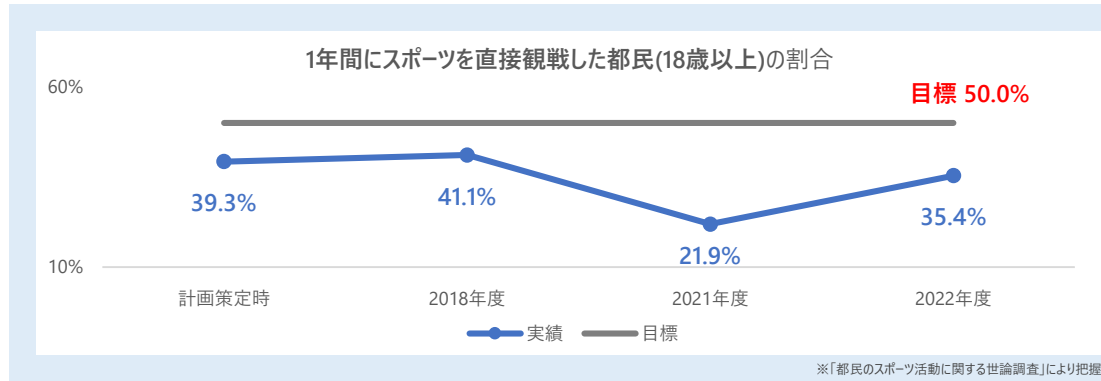
- ✓ 2022年度の60歳以上のスポーツ実施率は目標値75.0%に対して71.0%であった。
- ✓ 目標値には届かなかったものの、コロナ禍による行動制限期間中に大きく上昇して以降、高水準にある。
- ✓ 超高齢社会の進展を見据え、スポーツ振興を通じた健康寿命延伸や医療費抑制へ貢献していく必要がある。

3. 現行計画で掲げた各指標の推移、今後の課題・施策の方向性等について（目標3）

○都民に様々なスポーツを観戦したり楽しんでもらうとともに、そのためのアスリートの育成について設定した指標

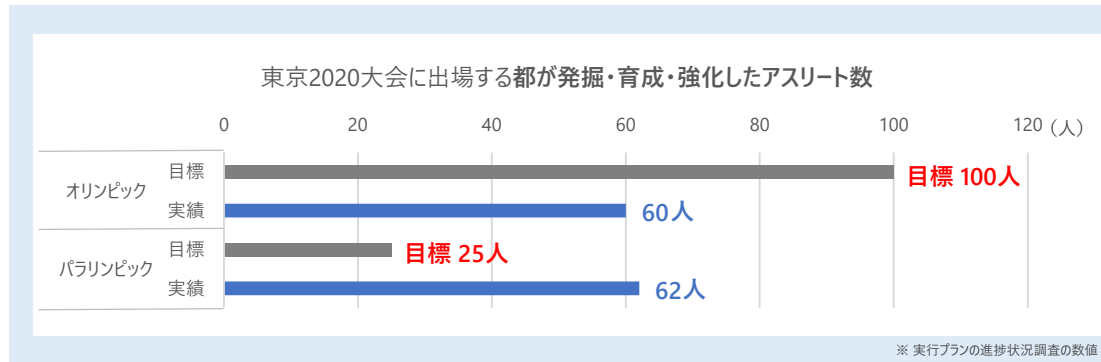
目標3…スポーツを通じた地域・経済の活性化

指標の達成状況



課題・方向性等

- ✓ 2022年度にスポーツを直接観戦した都民の割合は**目標値50.0%**に対して**35.4%**であった。
- ✓ スマートフォンなどデジタル機器を活用した観戦環境の整備が一層進んできているため、多様なメディアで観戦する都民の割合も含めて総合的に分析する必要がある。



- ✓ オリンピックに出場した、都が発掘・育成・強化したアスリート数は**目標100人**に対して**60人**であった。一方、パラリンピックでは、**目標25人**に対して**62人**と指標を達成した。
- ✓ アスリートが地域で活躍できる機会を創出することで応援気運を醸成し、競技スポーツの裾野を拡大させる。また、競技団体やアスリートを支援することで、国際大会をはじめ様々な舞台上で活躍できる基盤を整備する。

【各指標の達成状況について（まとめ）】

- ✓ スポーツ実施率は上昇傾向にあり、また1年間にスポーツを実施しなかった都民の割合について目標達成していることから、18歳以上の都民のスポーツ実施は全体として向上していると言える。
- ✓ 一方で、個別の指標を見ると、働き盛り世代の女性の実施率は目標を達成したが、高齢者の実施率は上昇基調にあるものの目標には達しておらず、子供のスポーツ嫌い、障害者のスポーツ実施率、「支える」活動の実施率などは横ばいの状況であり、一層の取組が必要である。

4. 次期計画で取り扱う「スポーツ」の範囲について

- 「スポーツ」はラテン語「deportare（気晴らしをする、楽しむ、遊ぶ）」が語源。
- 「スポーツ」の定義には様々な学説があり、スポーツに含まれる活動の範囲に明確な定めはない。
- スポーツ基本法は、「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」としている。
- 現行計画は、「ルールに基づいて、勝敗や記録を競うものだけでなく、余暇時間や仕事時間等を問わず健康を目的に行われる身体活動、更には遊びや楽しみを目的とした身体活動（相応のエネルギー消費を伴うもの）まで、幅広く捉えていく」としている。

次期計画における「スポーツ」の範囲についても、スポーツ基本法や現行計画を踏まえ、以下のとおり幅広く捉える形でいがか。

次期計画で取り扱う「スポーツ」の範囲

競技スポーツ（ルールに基づいて勝敗や記録を競うスポーツ）

【具体的事例】 陸上競技、水泳、サッカー、ラグビー、野球、自転車競技、ボッチャ、ゴールボール など



目的（健康の保持・増進、気晴らし・楽しみ、美容など）を持った身体活動

【具体的事例】 ウォーキング、ジョギング、サイクリング、筋力トレーニング、ラジオ体操、ダンス など

5. 次期計画の方向性（基本的な考え方）について

次期計画では、スポーツの価値やスポーツがもたらす効用を踏まえ、スポーツを通じてどのような社会を実現していくかを明らかにしていきたい。

【スポーツの価値（第3期スポーツ基本計画等に基づき整理）】

- ①「する」「みる」「ささえる」という様々な形での自発的な参画を通して、人々が感じる「楽しさ」や「喜び」に本質を持つ。（スポーツそのものが有する内在的価値）
- ②一方で、スポーツには、他の分野にも優れた効果を波及し、社会に変化を与え、様々な社会課題の解決に寄与する力もある。（スポーツが社会活性化等に寄与する価値、外在的価値）

生涯を通じてスポーツに親しみ、
健康に生き活きと生きる

スポーツを通して、
人々の相互理解が進み、**互いにつながる**

子供の体力向上・肥満解消

体力の保持増進

健康長寿社会の実現・フレイル予防

国際交流・異文化交流の促進

スポーツを通じた被災地交流

スポーツ施設における再生可能エネルギーの活用

環境に配慮したスポーツイベントの開催

アーバンスポーツなどを通じた若者の活躍

スポーツの外在的価値

スポーツが社会活性化等に寄与する価値

障害のある人とない人の交流

多様な社会における相互理解の促進

インクルーシブ社会の進展

地域における繋がりや醸成と
コミュニティ形成

アスリートの活躍、観客の感動

地域における一体感や活力の醸成

地域経済の活性化

都市のプレゼンス向上

スポーツの内在的価値(原点)

自発的な参画を通して、人々が感じる
「楽しさ」や「喜び」が本質

スポーツで**持続可能な社会**を築き、
未来にバトンをつなげる

誰でもスポーツにアクセスでき、
地域や経済が活性化する

6. 計画改定のスケジュール（予定）について

2023年度		2024年度	
3月	4～11月	12月	1月～3月
<p>★3月：東京都スポーツ振興審議会（第2回）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個別テーマに関する検討 ・ 都民のスポーツ活動に関する調査の集計結果の報告 	<p>4～11月：東京都スポーツ振興審議会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 個別テーマに関する検討、計画改定に係る調査審議 等 	<p>★11～12月：＜都＞「東京都スポーツ推進総合計画（改定）中間のまとめ」の策定</p> <p>東京都スポーツ振興審議会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「東京都スポーツ推進総合計画（改定）中間のまとめ」の審議 <p>＜都＞パブリックコメント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上記「中間のまとめ」を公表し都民から意見聴取 	<p>★2月：東京都スポーツ振興審議会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パブリックコメント結果の報告 ・ 「東京都スポーツ推進総合計画（改定）」への意見（答申） <p>★3月：＜都＞「東京都スポーツ推進総合計画（改定）」の策定</p>

參考資料

東京都スポーツ推進総合計画の位置付けについて

東京都スポーツ推進総合計画は、スポーツ基本法により地方自治体の策定が努力義務とされた地方スポーツ推進計画であり、策定にあたっては国の計画を参酌する必要がある。

昭和36年6月
(計画の策定)
第4条 文部大臣は、スポーツの振興に関する基本的計画を定めるものとする。
2 文部大臣は、前項の基本的計画を定めるについては、あらかじめ審議会等（国家行政組織法第8条に規定する機関をいう。）で政令で定めるものの意見を聴かなければならない。
3 都道府県及び市町村の教育委員会は、第1項の基本的計画を参酌して、その地方の実情に即したスポーツの振興に関する計画を定めるものとする。

スポーツ振興法（昭和36年法律第141号）

国

都

平成12年9月 スポーツ振興基本計画（計画期間：平成13年度～平成23年度）

平成14年7月 東京都スポーツ振興基本計画（計画期間：平成14年度～平成25年度）

平成18年9月 スポーツ振興基本計画（改定）（計画期間：平成13年度～平成23年度）

平成20年7月 東京都スポーツ振興基本計画（計画期間：平成20年度～平成28年度）

平成23年6月
(スポーツ基本計画)
第9条 文部科学大臣は、スポーツに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、スポーツの推進に関する基本的な計画を定めなければならない。
2 文部科学大臣は、スポーツ基本計画を定め、又はこれを変更しようとするときは、あらかじめ、審議会等で政令で定めるものの意見を聴かなければならない。
(地方スポーツ推進計画)

スポーツ基本法（平成23年法律第78号）

第10条 都道府県及び市町村の教育委員会（その長がスポーツに関する事務を管理し、及び執行することとされた地方公共団体にあつては、その長）は、スポーツ基本計画を参酌して、その地方の実情に即したスポーツの推進に関する計画を定めるよう努めるものとする。

平成24年3月 スポーツ基本計画（平成24年度から今後10年間の基本方針と5年間の計画）

平成24年3月 東京都障害者スポーツ振興計画（計画期間：平成24年度～令和2年度）

平成25年3月 東京都スポーツ推進計画（計画期間：平成25年度～令和2年度）

平成29年3月 スポーツ基本計画（第2期）（計画期間：平成29年度～令和3年度）

平成30年3月 東京都スポーツ推進総合計画（計画期間：平成30年度～令和6年度）

令和4年3月 スポーツ基本計画（第3期）（計画期間：令和4年度～令和8年度）

令和7年3月 東京都スポーツ推進総合計画（改定）
計画期間（案）：令和7年度～令和12年度

第3期スポーツ基本計画（概要）

【第2期計画期間中の総括】

- ① 新型コロナウイルス感染症：
 - ▶ 感染拡大により、スポーツ活動が制限
- ② 東京オリンピック・パラリンピック競技大会：
 - ▶ 1年延期後、原則無観客の中で開催
- ③ その他社会状況の変化：
 - ▶ 人口減少・高齢化の進行
 - ▶ 地域間格差の広がり
 - ▶ DXなど急速な技術革新
 - ▶ ライフスタイルの変化
 - ▶ 持続可能な社会や共生社会への移行

こうした出来事等を通じて、改めて確認された

- ・「楽しさ」「喜び」「自発性」に基づき行われる本質的な『スポーツそのものが有する価値』（Well-being）
- ・スポーツを通じた地域活性化、健康増進による健康長寿社会の実現、経済発展、国際理解の促進など『スポーツが社会活性化等に寄与する価値』

を更に高めるべく、第3期計画では次に掲げる施策を展開

1. 東京オリ・パラ大会のスポーツ・レガシーの継承・発展に資する重点施策

持続可能な国際競技力の向上

- 東京大会の成果を一過性のものとせず、持続可能な国際競技力を向上させるため、
 - ・NFの強化戦略プランの実効化を支援
 - ・アスリート育成パスウェイを構築
 - ・スポーツ医・科学、情報等による支援を充実
 - ・地域の競技力向上を支える体制を構築

共生社会の実現や

多様な主体によるスポーツ参画の促進

- 東京大会による共生社会への理解・関心の高まりと、スポーツの機運向上を契機としたスポーツ参画を促進
- オリパラ教育の知見を活かしたアスリートとの交流活動等を推進

スポーツを通じた国際交流・協力

- 東京大会に向けて、世界中の人々にスポーツの価値を届けたスポーツ・フォー・トゥモロー（SFT）事業で培われた官民ネットワークを活用し、更なる国際協力を展開、スポーツSDGsにも貢献（ドーピング防止活動に係る人材・ネットワークの活用等）

大規模大会の運営ノウハウの継承

- 新型コロナウイルス感染症の影響下という困難な状況の下で、東京大会を実施したノウハウを、スポーツにおけるホスピタリティの向上に向けた取組も含め今後の大規模な国際競技大会の開催運営に継承・活用

地方創生・まちづくり

- 東京大会による地域住民等のスポーツへの関心の高まりを地方創生・まちづくりの取組に活かし、将来にわたって継続・定着
- 国立競技場等スポーツ施設における地域のまちづくりと調和した取組を推進

スポーツに関わる者の心身の安全・安心確保

- 東京大会でも課題となったアスリート等の心身の安全・安心を脅かす事態に対応するため、
 - ・誹謗中傷や性的ハラスメントの防止
 - ・熱中症対策の徹底など安全・安心の確保
 - ・暴力根絶に向けた相談窓口の一層の周知・活用

2. スポーツの価値を高めるための第3期計画の新たな「3つの視点」を支える施策

スポーツを「つくる／はぐくむ」

社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれず柔軟に見直し、最適な手法・ルールを考えて作り出す。

- ◆ 柔軟・適切な手法や仕組みの導入等を通じた、多様な主体が参加できるスポーツの機会創出
- ◆ スポーツに取り組む者の自主性・自律性を促す指導ができる質の高いスポーツ指導者の育成
- ◆ デジタル技術を活用した新たなスポーツ機会や、新たなビジネスモデルの創出などDXを推進

スポーツで「あつまり、ともに、つながる」

様々な立場・背景・特性を有した人・組織があつまり、ともに課題に対応し、つながりを感じてスポーツを行う。

- ◆ 施設・設備整備、プログラム提供、啓発活動により誰もが一緒にスポーツの価値を享受できる、スポーツを通じた共生社会の実現
- ◆ スポーツ団体のガバナンス・経営力強化、関係団体等の連携・協力による我が国のスポーツ体制の強化
- ◆ スポーツ分野の国際協力や魅力の発信

スポーツに「誰もがアクセスできる」

性別や年齢、障害、経済・地域事情等の違い等によって、スポーツの取組に差が生じない社会を実現し、機運を醸成。

- ◆ 住民誰もが気軽にスポーツに親しめる「場づくり」等の機会の提供
- ◆ 居住地域にかかわらず、全国のアスリートがスポーツ医・科学等の支援を受けられるよう地域機関の連携強化
- ◆ 本人が望まない理由でスポーツを途中で諦めることがない継続的なアクセスの確保

3. 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む12の施策

① 多様な主体におけるスポーツの機会創出

地域や学校における子供・若者のスポーツ機会の充実と体力向上、体育の授業の充実、運動部活動改革の推進、女性・障害者・働く世代・子育て世代のスポーツ実施率の向上 等

④ スポーツの国際交流・協力

国際スポーツ界への意思決定への参画支援、スポーツ産業の国際展開を促進するプラットフォームの検討 等

⑦ スポーツによる地方創生、まちづくり

武道やアウトドアスポーツ等のスポーツツーリズムの更なる推進など、スポーツによる地方創生、まちづくりの創出の全国での加速化 等

⑩ スポーツ推進のためのハード、ソフト、人材

民間・大学も含めた地域スポーツ施設の有効活用の促進、地域スポーツコミッションなど地域連携組織の活用、全N Fでの人材育成及び活用に関する計画策定を促進、女性のスポーツ指導に精通した指導者養成支援 等

② スポーツ界におけるDXの推進

先進技術を活用したスポーツ実施のあり方の拡大、デジタル技術を活用した新たなビジネスモデルの創出 等

⑤ スポーツによる健康増進

健康増進に資するスポーツに関する研究の充実・調査研究成果の利用促進、医療・介護や企業・保険者との連携強化 等

⑧ スポーツを通じた共生社会の実現

障害者や女性のスポーツの実施環境の整備、国内外のスポーツ団体の女性役員候補者の登用・育成の支援、意識啓発・情報発信 等

⑪ スポーツを実施する者の安全・安心の確保

暴力や不適切な指導等の根絶に向けた指導者養成・研修の実施、スポーツ安全に係る情報発信・安全対策の促進 等

③ 国際競技力の向上

中長期の強化戦略に基づく競技力向上支援システムの確立、地域における競技力向上を支える体制の構築、国・JSPF・地方公共団体が一体となった国民体育大会の開催 等

⑥ スポーツの成長産業化

スタジアム・アリーナ整備の着実な推進、他産業とのオープンノベーションによる新ビジネスモデルの創出支援 等

⑨ スポーツ団体のガバナンス改革・経営力強化

ガバナンス・コンプライアンスに関する研修等の実施、スポーツ団体の戦略的経営を行う人材の雇用創出を支援 等

⑫ スポーツ・インテグリティの確保

スポーツ団体へのガバナンスコードの普及促進、スポーツ仲裁・調停制度の理解促進等の推進、教育研修や研究活動等を通じたドーピング防止活動の展開 等

『感動していただけるスポーツ界』の実現に向けた目標設定

全ての人々が自発的にスポーツに取り組むことで自己実現を図り、スポーツの力で、前向きで活力ある社会と、絆の強い社会を目指す

国民のスポーツ実施率を向上

- ✓ 成人の週1回以上のスポーツ実施率を **70%**（障害者は**40%**）
- ✓ **1年に一度以上スポーツを実施する成人の割合を100%に近づける**（障害者は**70%を目指す**）

生涯にわたって運動・スポーツを継続したい子供の増加

（児童86%⇒**90%**、生徒82%⇒**90%**）

子供の体力の向上

（新体力テストの総合評価C以上の児童68%⇒**80%**、生徒75%⇒**85%**）

誰もがスポーツに参画でき、共に活動できる社会を実現

- ✓ 体育授業への参加を希望する障害のある児童生徒の見学ゼロを目指した学習プログラム開発
- ✓ **スポーツ団体の女性理事の割合を40%**

オリンピック・パラリンピック等の国際競技大会で、過去最高水準の金メダル数、総メダル数、入賞者数、メダル獲得競技数等の実現

スポーツを通じて活力ある社会を実現

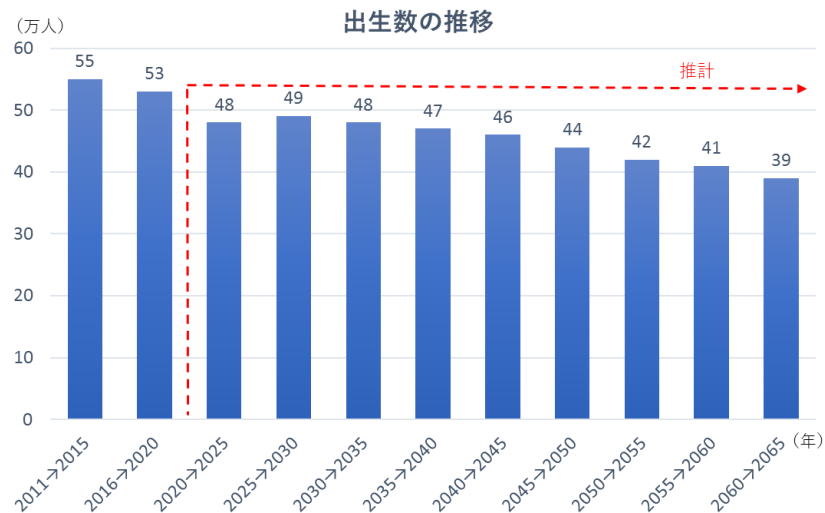
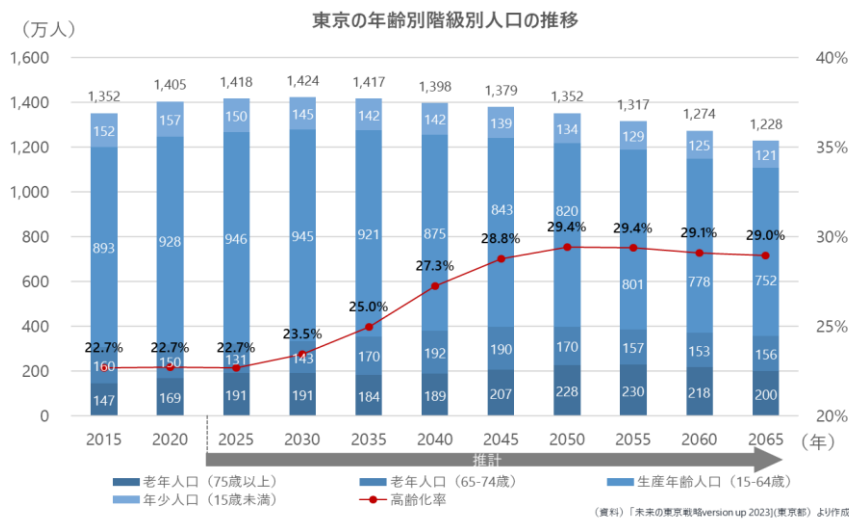
- ✓ **スポーツ市場規模15兆円の達成**（2025年まで）
- ✓ **スポーツ・健康まちづくり**に取り組む地方公共団体の割合15.6%⇒**40%**

スポーツを通じて世界とつながる

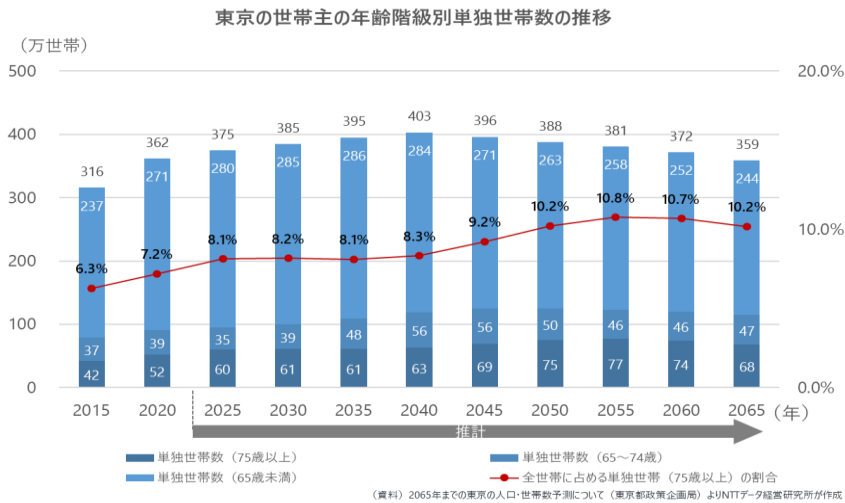
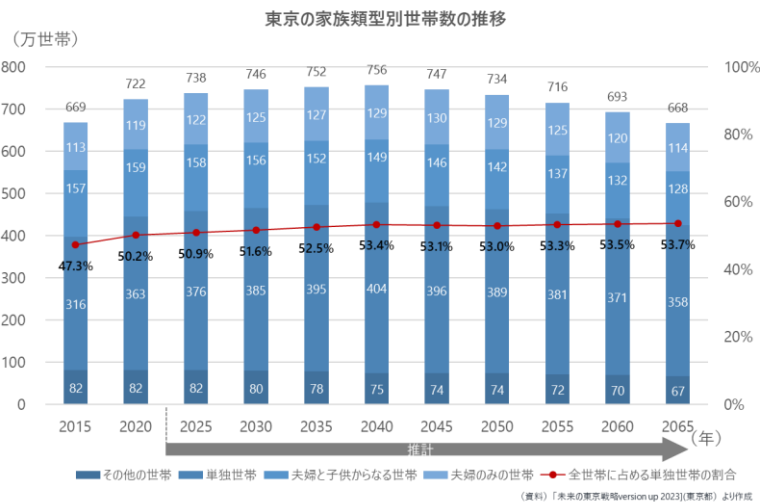
- ✓ **ポストSFT事業を通じて世界中の国々の700万人の人々への裨益を目標に事業を推進**
- ✓ **国際競技連盟（IF）等役員数37人規模の維持・拡大**

スポーツを取り巻く環境の変化（少子高齢化等）

東京都の人口は、2030年をピークに減少し始め、高齢化率が年々高まり、2050年には29.4%と約3割が65歳以上になると想定される。また、出生数の推移を見ると、減少傾向が続いており、2060年から2065年には約39万人まで減ることが見込まれている。



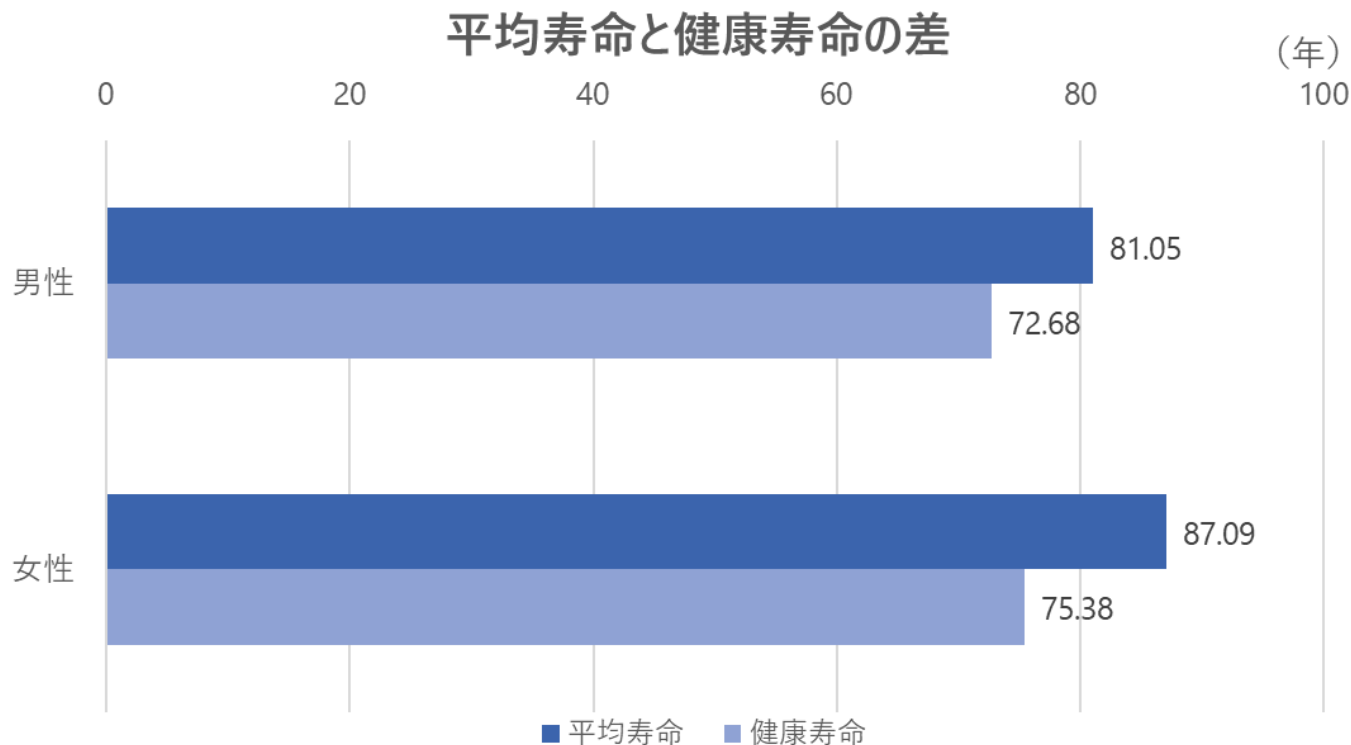
東京における世帯数は、2040年の756万世帯をピークに見込まれている。一方、全世帯数のうち単独世帯の割合は増加傾向にあり、2020年には半数（50%）を超えている。また、単独世帯に占める高齢世帯が増加傾向にあり、高齢者の孤独が進行することが考えられる。



スポーツを取り巻く環境の変化（平均寿命と健康寿命等）

令和5年7月に厚生労働省から「令和4年簡易生命表」が公表された。日本人の平均寿命と健康寿命は下表のとおりであり、平均寿命と健康寿命の差は、男性で8.37年、女性で11.71年となっている。

一方で、都民医療費の総額は、平成30年度の約4.5兆円から令和4年度には5兆円を超えとなり、5年間で約4,800億円増加している。今後も高齢者の人口増加が見込まれており、更なる医療費の増加が予想される。



※平均寿命はR4、健康寿命はR1の時点の数字
(資料)「令和4年簡易生命表」(厚生労働省)、「2022年高齢社会白書」(内閣府)を基にNTTデータ経営研究所が作成

※健康寿命：健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間

東京2025世界陸上競技選手権大会 開催基本計画（概要版）

資料 2 - 1

第1章 大会概要

正式名称	東京2025世界陸上競技選手権大会	競技会場等	メインスタジアム	国立競技場
期間	2025年9月13日～21日（9日間）		ウォームアップ会場 練習会場	代々木公園陸上競技場
参加国	約210か国・地域			東京体育館陸上競技場
参加選手数	約2,000人（見込み）			東京大学陸上競技場
		大井ふ頭中央海浜公園陸上競技場		
種目数 （予定）	49種目（男子24種目、女子24種目、男女混合1種目） 100m、200m、400m、800m、1500m、5000m、10000m、3000m障害物、女子100mハードル、男子110mハードル、400mハードル、4×100mリレー、4×400mリレー、混合4×400mリレー、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、女子七種競技、男子十種競技、20km競歩、35km競歩、マラソン			

第2章 基本方針

ミッション

多くの人々に夢や希望を届ける

今後の国際スポーツ大会のモデルを示す

大会開催ビジョン

東京ドリーム 東京ブランド 東京モデル

大会メインカラー

江戸紫（えどむらさき）

（参考）カラーコード

7 4 5 3 9 9

Red:116 Green:83 Blue:153



東京2025世界陸上競技選手権大会 開催基本計画 (概要版)

第3章 大会の成功と未来へ紡ぐレガシー

東京ドリーム

アスリートが活躍する最高の場を創出

満員の国立競技場の声援の下で、自らのベストを尽くすことができる最高の環境を提供します。



©Getty Images for World Athletics

東京ブランド

街全体でのおもてなし

成熟した社会インフラや温かいおもてなしで歓迎し、東京の魅力を体験できる取組を展開します。



東京モデル

こどもたちへの観戦機会等の提供

未来を担うこどもたちに大会を観戦する機会を提供し、夢や希望を育む契機にしていきます。



多様な人々の大会への参画

年齢・障害の有無に関わらず誰もが、スポーツの素晴らしさ、多様な価値観を認めあう大切さなどが実感できるよう、大会への参画を推進します。



©Getty Images for World Athletics

戦略的なPR

様々な広報媒体と連携した広報や気運醸成の取組、大会ロゴを用いた広報PRを展開し、大会の魅力を効果的に発信します。



環境負荷の低減

省エネの推進、再エネの活用、環境に配慮した輸送方法の取組等を通じて、脱炭素社会の実現に寄与していきます。



スポーツ文化の
広がり

次世代への価値の
継承

ボランティア文化の
一層の発展

未来につなぐ
世界との絆

環境配慮行動の
気運醸成

持続可能な
大会モデル

東京2020大会のレガシーも引き継ぎ、さらに、東京2025デフリンピックとの連携・展開により**共生社会の実現**に繋げていく。

第4章 組織・運営体制

公平・公正、透明性を確保し、フェアネスを体現した組織運営を徹底

○組織体制について

○運営体制(ガバナンスの確保の取組)について

第5章 大会運営

競技運営	アスリートが安全かつ最大限のパフォーマンスを発揮できる競技環境の整備
会場運営	アスリートセンタードの視点に立つとともに観客をおもてなしの心で迎える会場運営
広報	大会の成功に向けて、大会の価値を広く世界へ発信するための広報活動
大会サービス	大会運営に必要な不可欠な出入国や宿泊、輸送、警備、飲食などのサービス提供

東京 2025 世界陸上競技選手権大会 開催基本計画



Copyright : JAPAN SPORT COUNCIL

2023（令和 5）年 11 月

一般財団法人東京 2025 世界陸上財団

一般財団法人東京 2025 世界陸上財団 会長メッセージ

2025（令和 7）年 9 月、東京に、世界の熱い視線が注がれます。単一競技の国際大会としては、世界最高峰の大会の一つである世界陸上が東京で開催されます。日本での開催は 2007 年の大阪大会以来 18 年ぶり、東京では 1991 年以来、実に 34 年ぶりの開催になります。都民、国民を始めとする多くの方々に、この世界陸上を心から楽しんでいただきたいと思います。



陸上には無限の力があります。2025 年の世界陸上では、満員の国立競技場で大声援を浴びたアスリートの躍動に胸を躍らせながら、陸上を持つ無限の力を直に感じてもらいたいと思っております。世界を代表するアスリートの熱戦は、都民、国民そして多くの方々に夢や希望をもたらすことでしょう。そして、私たちも「する・みる・支える」を通じて陸上を楽しむことで、心身の健康が高まり、生きがいも創出され、仲間との絆が深まるなど、生活をより豊かなものにすることができます。

私たちは、財団発足時に「多くの人々に夢や希望を届ける」、「今後の国際スポーツ大会のモデルを示す」という 2 つのミッションを掲げ、10 月には大会開催ビジョン（「東京ドリーム」「東京ブランド」「東京モデル」）を打ち出しました。こうしたミッション、ビジョン、そして、スポーツの根幹であるフェアネスとアスリートセンタードを基本に、大会を成功に導くための開催基本計画を策定いたしました。

World Athletics をはじめとしたステークホルダーと連携を深めていくとともに、都民、国民の皆様のご理解とご協力を得ながら、世界陸上の成功に向けて歩みを着実に進めてまいります。

2023（令和 5）年 11 月

一般財団法人東京 2025 世界陸上財団会長

尾 縣 貢

■開催基本計画について

本計画は、一般財団法人東京 2025 世界陸上財団（以下「財団」という。）が、東京 2025 世界陸上競技選手権大会（以下「大会」という。）の成功に向けて着実に準備を進めていくため策定したものであり、ミッションや大会開催ビジョン（以下「ビジョン」という。）などの基本方針、大会運営などについて記載しています。

今後、本計画を踏まえ、各分野における具体的な実施計画の検討を進めるとともに、関係者との連携・協力体制を一層強化し、そして都民、国民からの、ご理解をいただきながら大会を成功に導いてまいります。

本計画は、全 5 章で構成されています。

第 1 章 大会概要

- 大会の開催概要などについて記載しています。

第 2 章 基本方針

- 大会におけるミッションやビジョンなど、基本方針について記載しています。

第 3 章 大会の成功と未来へ紡ぐレガシー

- ミッション、ビジョン（東京ドリーム、東京ブランド、東京モデル）の実現に向けた取組や、大会後のレガシーについて記載しています。

第 4 章 組織・運営体制

- 大会運営を支える組織体制やガバナンスなどについて記載しています。

第 5 章 大会運営

- 大会成功に向けた主要目標、取組内容などについて記載しています。

■目次

第1章 大会概要	1
1. 世界陸上について	
2. 東京2025世界陸上について	
3. ウォームアップ会場・練習会場	
第2章 基本方針	4
1. ミッション	
2. ビジョン	
3. ビジョン実現に向けた取組の方向性	
4. 大会メインカラー	
第3章 大会の成功と未来へ紡ぐレガシー	9
1. 大会の成功に向けた取組	
2. 大会が未来に紡ぐレガシー	
3. 2025年から生まれる新たな未来	
第4章 組織・運営体制	18
1. 組織体制	
2. 運営体制（ガバナンス）	
第5章 大会運営	23
1. 競技運営	
2. 会場運営	
3. 大会サービス	
4. ボランティア	
5. 広報	
6. メディア運営	
7. マーケティング	
8. チケット販売	
9. プロトコール・ホスピタリティ	

第 1 章 大会概要

第1章 大会概要

1. 世界陸上について

- 世界陸上は、1983年に当時の国際陸上競技連盟（現 World Athletics。以下「WA」という。）によって創設され、フィンランドのヘルシンキで第1回大会が開催されました。
- WA加盟国・地域（214カ国・地域）から約2,000人の選手が出場し、単一競技の国際大会としては世界最高峰の大会の一つとされています
- 東京での世界陸上の開催は1991年以来34年ぶりとなり、日本では2007年の大阪大会以来18年ぶり3回目の開催になります。（同一都市での2回の開催はヘルシンキとならび最多、また世界陸上を3回開催する国は日本が初）

2. 東京2025世界陸上について

（1）大会名称

大会正式名称：東京2025世界陸上競技選手権大会

大会略称：東京2025世界陸上

英語正式名称：World Athletics Championships Tokyo 25

英語略称：WCH Tokyo 25

（2）主催/主管

主催：世界陸上競技連盟（World Athletics）

主管：公益財団法人日本陸上競技連盟（JAAF）

（3）開催期間

2025年9月13日（土）～21日（日） 9日間

（4）会場

国立競技場ほか

（5）参加選手数（見込み）

約2,000人



Copyright : JAPAN SPORT COUNCIL

(6) 種目数 (予定)

49 種目 (男子 24 種目、女子 24 種目、男女混合 1 種目)

【種目一覧】

100m、200m、400m、800m、1500m、5000m、10000m、3000m 障害物、女子 100m ハードル、男子 110m ハードル、400m ハードル、4×100m リレー、4×400m リレー、混合 4×400m リレー、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、女子七種競技、男子十種競技、20km 競歩、35km 競歩、マラソン

3. ウォームアップ会場・練習会場

(1) 代々木公園陸上競技場



(2) 東京体育館陸上競技場



(3) 東京大学陸上競技場



(4) 大井ふ頭中央海浜公園陸上競技場

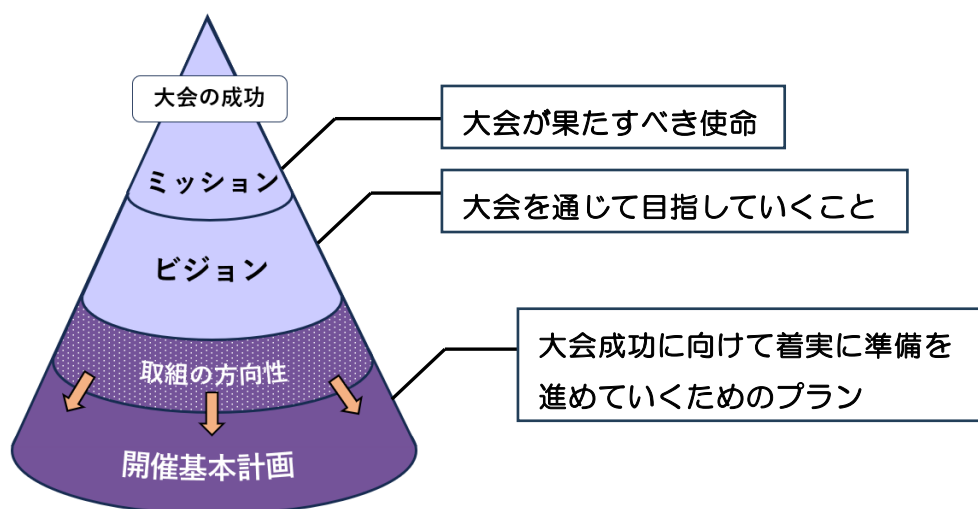


第 2 章 基本方針

第2章 基本方針

財団内の各部署が、多岐にわたる業務を円滑に遂行し、大会を成功に導くため、その基本方針となる「ミッション」「ビジョン」を定めました。今後、基本方針に基づき、財団が一丸となって大会準備を進め、大会の成功を目指してまいります。

<体系図>



1. ミッション

1. 多くの人々に夢や希望を届ける
2. 今後の国際スポーツ大会のモデルを示す

ミッションには、「陸上やスポーツの魅力と価値を世界へ広める」、「東京や日本の素晴らしさを積極的に発信する」、「スポーツの原点に立ち返り、シンプルな運営などを通じた持続可能な大会を目指す」、「スポーツの根幹であるフェアネスを体現した信頼される組織をつくる」、などの思いが込められています。

2. ビジョン

1. 東京ドリーム ～ドキドキ、ワクワク、みんなの笑顔が織りなす大会の実現～

- ・ アスリートセンタード、フェアネスの理念を前提として、満員の会場で大声援を受けたトップアスリートが己の限界に挑戦できる機会を提供することで、陸上の素晴らしさを発信し、感動・興奮を生み出します。
- ・ アスリートを中心にすべてのステークホルダーが主役として大会運営に参画し、誰もが東京大会を開催して良かった、楽しかったと思える大会、“東京ドリーム”を実現します。

2. 東京ブランド ～東京と世界を結び、東京らしさを発信～

- ・ 大会を通じて、国籍や文化などの垣根を越えて、世界中から様々な人が東京にあつまり、絆を深める中で東京と世界を結ぶきっかけを創出します。
- ・ おもてなしの心や安全・安心、食、芸術文化などの東京らしさや、先進的な科学技術、高度に発達した交通網など、活力に溢れた都市東京の魅力、“東京ブランド”を発信し、多くの人に体験してもらいます。

3. 東京モデル ～明日への希望と持続可能な未来へのステップ～

- ・ 世界最高峰の大会に直接触れることで、未来を担う子どもたちが夢や希望を育み、学び成長するとともに、みんながスポーツをより身近な存在として再発見することで、スポーツが持つ様々な価値を次の世代へ繋げていきます。
- ・ コンパクトで環境に配慮した持続可能な大会の実現や、フェアネスを体現した信頼される組織運営を通じて、未来に向けた国際スポーツの新しい世界標準、“東京モデル”を確立します。

ミッションを踏まえ大会を通じて目指していくこととして、ビジョンを「東京ドリーム」、「東京ブランド」、「東京モデル」という3つのキーワードで表現しました。



©Getty Images for World Athletics

3. ビジョン実現に向けた取組の方向性

大会の成功のためには、大会の運営の根底をなすビジョンをより具体的な形で計画・運営に反映させることが重要であると私たちは考えます。そこで、ビジョンを分野別のレベルまでブレイクダウンした取組の方向性を決めました。

第3章は、これらの取組の方向性を踏まえたものになっています。

○組織運営

- ・都民・国民の信頼を得るため、公平・公正、透明性を確保し、フェアネスを体現した組織運営を徹底する。

○大会運営

- ・今後も継続的に開催可能な国際スポーツ大会とするため、簡素な中にもみんなが感動を共有できる場として大会を成功に導く。

○競技運営

- ・すべてのアスリートが、フルスタジアムの大声援の中で、最高のパフォーマンスを発揮し、その姿を様々な形で多くの人々に届ける。

○東京の魅力発信

- ・訪日外国人をはじめ、誰もが大会だけでなく滞在中いつでも楽しめるよう、東京の魅力や素晴らしさを積極的に発信する。

○環境への配慮

- ・最新技術を活用した省エネルギーの推進や徹底したフードロスの削減などにより、環境負荷の小さいエコな大会を目指す。

○レガシー

- ・国際スポーツ大会の運営ノウハウ、こどもたちへの大会の思い出、健康増進の意識向上、ジェンダー平等などをレガシーとして残していく。

○国内各地・世界各国との連携

- ・世界各国から訪れる選手団等と各地との連携を強め、大会の魅力をみんなで共有する。

○大会経費

- ・大会準備運営の効率化などにより経費圧縮を図るとともに、収入を最大限確保することで収支均衡を図る。

4. 大会メインカラー

私たちは、大会のイメージを統一したものとするとともに、より多くの人々に認知していただくために、大会のメインカラーを設定しました。

大会メインカラーの「江戸紫（えどむらさき）」は、“東京らしさ”、“大会の気品”、“多様性”を表しています。

（1）カラーコンセプト

- 江戸で誕生した伝統色であり、従来の大会とは一線を画す“東京らしさ”や東京の美意識を表現しています。
- 「紫」は、国内外問わず、古来より気品のある色として認知されており、世界陸上の格式高さに調和した上品なイメージを演出します。
- また、「紫」は多様性や包摂性を象徴する色として用いられることもあり、国籍や文化などの垣根を越えたインクルーシブな大会であることを訴求します。

（2）メインカラーデータ



江戸紫（えどむらさき）
カラーコード
745399
Red:116
Green:83
Blue:153

第3章 大会の成功と未来へ紡ぐレガシー

第3章 大会の成功と未来へ紡ぐレガシー

1. 大会の成功に向けた取組

私たちは、ビジョンのなかで、大会を通じて、陸上やスポーツの魅力や感動・興奮をみんなで楽しみ、東京の魅力や伝統を世界に発信し、未来に向けた国際スポーツ大会の新しいモデルを示していくことを掲げました。ビジョンで掲げた3つの柱について、東京都が策定した「ビジョン2025 スポーツが広げる新しいフィールド」や「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」も踏まえ、日本陸上競技連盟や東京都等を始めとする関係者と緊密に連携して以下の取組を着実に進め、ビジョンの実現を目指します。

ビジョンの実現に向けた取組を通じて、大会開催で得られるかけがえのない経験などをレガシーとして未来へと紡いでいきます。

東京ドリーム ～ドキドキ、ワクワク、みんなの笑顔が織りなす大会の実現～

- ・アスリートセンタード、フェアネスの理念を前提として、満員の会場で大声援を受けたトップアスリートが己の限界に挑戦できる機会を提供することで、陸上の素晴らしさを発信し、感動・興奮を生み出します。
- ・アスリートを中心にすべてのステークホルダーが主役として大会運営に参画し、誰もが東京大会を開催して良かった、楽しかったと思える大会、“東京ドリーム”を実現します。

(アスリートが活躍する最高の場を創出)

- ・200を超える国・地域から参加する約2,000人のアスリートが、満員の国立競技場の声援の下で、自らのベストを尽くすことができる最高の環境を提供します。
- ・自己の限界に挑戦するアスリートの姿により、人々の記憶に残る感動・興奮に溢れる大会にしていきます。

(多様な人々の大会への参画)

- 都民、国民誰もが、年齢、障害の有無にかかわらず、スポーツの素晴らしさ、多様な価値観を認めあう共生社会の大切さなどが実感できるように、大会への参画を推進します。
- 国内外問わず多様な人々がボランティアとして参加し、一緒に大会を創り上げることで、かけがえのない経験を共有すると共に、東京 2020 大会を通じて広がったボランティア文化のさらなる発展を支援していきます。
- 未来を担うこどもたちが、大会を通じて、新たな視野を広げるとともに、スポーツの素晴らしさを感じられるよう、大会の準備・運営に参加できる機会を設けます。
- 大会の象徴となるロゴの制作を一般公募により実施するとともに、ジュニア陸上選手の大会への思いを、ロゴの募集コンセプトに反映します。

(スポーツを楽しむ機会の創出)

- 競技会場等において多くの人々がスポーツを楽しむきっかけを提供し、都民・国民が、健康増進に向け、継続的にスポーツに取り組むことができるようにしていきます。
- SNS を積極的に活用することにより、スポーツに興味を持つ人々の交流を促し、コミュニティの輪を広げていきます。



©Getty Images for World Athletics



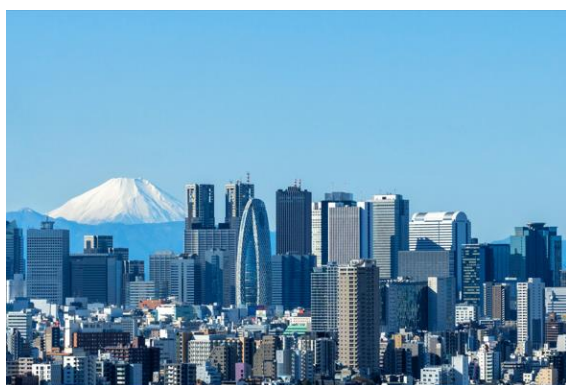
©Getty Images for World Athletics

東京ブランド ～東京と世界を結び、東京らしさを発信～

- 大会を通じて、国籍や文化などの垣根を越えて、世界中から様々な人が東京にあつまり、絆を深める中で東京と世界を結びきっかけを創出します。
- おもてなしの心や安全・安心、食、芸術文化などの東京らしさや、先進的な科学技術、高度に発達した交通網など、活気に溢れた都市東京の魅力、“東京ブランド”を発信し、多くの人に体験してもらいます。

（街全体でのおもてなし）

- 成熟した社会インフラや大会スタッフの温かいおもてなしで、世界中から集まる選手や関係者、観客などを歓迎します。
- 大会開催を契機に、東京の芸術文化に触れ、楽しむことのできる取組を展開し、東京の魅力を体験してもらいます。また、競技会場や会場周辺、空港の装飾等を活用し、東京の魅力を発信していきます。
- 安全・安心な大会を実現するため、警備体制の確保や暑さ対策に取り組んでいきます。



（戦略的な PR の実施）

- ホームページをはじめとした様々な広報媒体と連携した広報や気運醸成の取組を展開します。
- 大会ロゴを用いた広報 PR を展開し、大会の魅力を効果的に発信していきます。

(世界中の人々との交流)

- 200 を超える国、地域から集まる世界中の人々との交流を通じて、東京や日本の多彩な魅力を発信し、日本全体での気運醸成を図ります。

(先進的な技術の活用)

- 競技会場等で、デジタル技術や環境技術を紹介するなど、大会を通じて東京の先進技術を国内外に発信します。



東京モデル ～明日への希望と持続可能な未来へのステップ～

- 世界最高峰の大会に直接触れることで、未来を担う子どもたちが夢や希望を育み、学び成長するとともに、みんながスポーツをより身近な存在として再発見することで、スポーツが持つ様々な価値を次の世代へ繋げていきます。
- コンパクトで環境に配慮した持続可能な大会の実現や、フェアネスを体現した信頼される組織運営を通じて、未来に向けた国際スポーツの新しい世界標準、“東京モデル”を確立します。

(子どもたちへの観戦機会等の提供)

- 都内や東日本大震災の被災地の子どもたちに大会を観戦する機会を提供し、限界に挑戦するアスリートの姿を間近に見ることで、夢や希望を育む契機にしていきます。
- 子どもたちと陸上アスリート等との交流や競技体験、競技についての学び等を通じて、スポーツの素晴らしさに触れ、世界の人々をより身近に感じられる機会を提供し、子どもの学び・成長を支援します。



提供：日本陸上競技連盟



(環境負荷の低減)

- 大会運営を通じて、省エネルギーの推進、再生可能エネルギーの活用や環境に配慮した輸送方法・車両の導入等の取組を国内外に発信することで、脱炭素社会の実現に寄与していきます。
- 使い捨てプラスチックの削減や、備品等の調達においてレンタルやリースを活用するなど、3Rを推進し環境負荷の少ない大会を目指します。



(フェアネスを体現した組織運営)

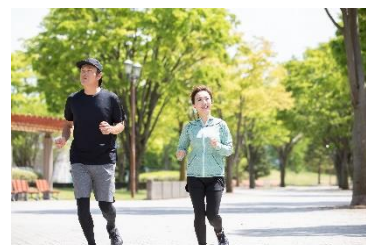
- 「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」を踏まえ、スポーツの根幹であるフェアネスを体現した、都民・国民の信頼を得ることができる組織運営を行います。

2. 大会が未来に紡ぐレガシー

大会の成功に向けた取組を通じて得られる以下のレガシーを未来に繋げていきます。

(スポーツ文化の広がり)

世界最高水準の陸上競技に直接触れることにより、スポーツが持つ素晴らしい価値を認識、共有し、スポーツの裾野の拡大や健康増進の意識向上に繋がります。



(次世代への価値の継承)

競技観戦や競技体験を通じて、未来を担う子どもたちが陸上競技を身近に感じ、スポーツを始めるきっかけに繋がっていくとともに、フェアネスなどスポーツの持つ価値を次世代に継承していきます。



提供：日本陸上競技連盟

(ボランティア文化の一層の発展)

大会運営に積極的な関わり合いをもち、ともに楽しみたいという方々の気持ちを尊重し、様々な場面における活動機会を提供することで、みんなで大会を創り上げ、そうした経験が自己実現に繋がるようなボランティア文化の一層の発展を図ります。



©Getty Images for World Athletics

(未来につなぐ世界との絆)

心のこもったおもてなしや伝統と革新が織りなす東京や日本の魅力発信と、国内各地と訪日外国人との繋がりのきっかけづくりや交流により、東京及び日本のプレゼンス向上を図り、世界との強固な絆を未来に引継いでいきます。



(環境配慮行動の気運醸成)

廃棄物の分別の徹底や発生の抑制、気候変動対策など、環境負荷の少ない大会運営に取り組むとともに、その情報発信を通じて、環境に対する意識を啓発し、気運を高めます。



(持続可能な大会モデル)

フェアネスを体現した信頼される組織運営やコンパクトで最適化された大会運営を通じて、今後も継続的に開催可能な国際スポーツ大会のモデルを構築します。



3. 2025 年から生まれる新たな未来

陸上をはじめとするスポーツは、年齢や国籍、障害の有無等にかかわらず、みんなが一緒に楽しむことができるものであり、誰にとっても開かれたものです。

2025 年は、世界陸上だけではなく、東京 2025 デフリンピックも開催されます。都民、国民からのスポーツへの注目度が高まるこの機会を捉えて、両大会の魅力と同時に発信するなど、広報や気運醸成の取組を連携して展開することで、両大会のビジョンやメッセージをより多くの人たちに届けていきます。さらに、2021 年に東京で開催された東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーも、しっかりと引継ぎ、お互いを尊重し、支え合う共生社会の実現を目指していきます。

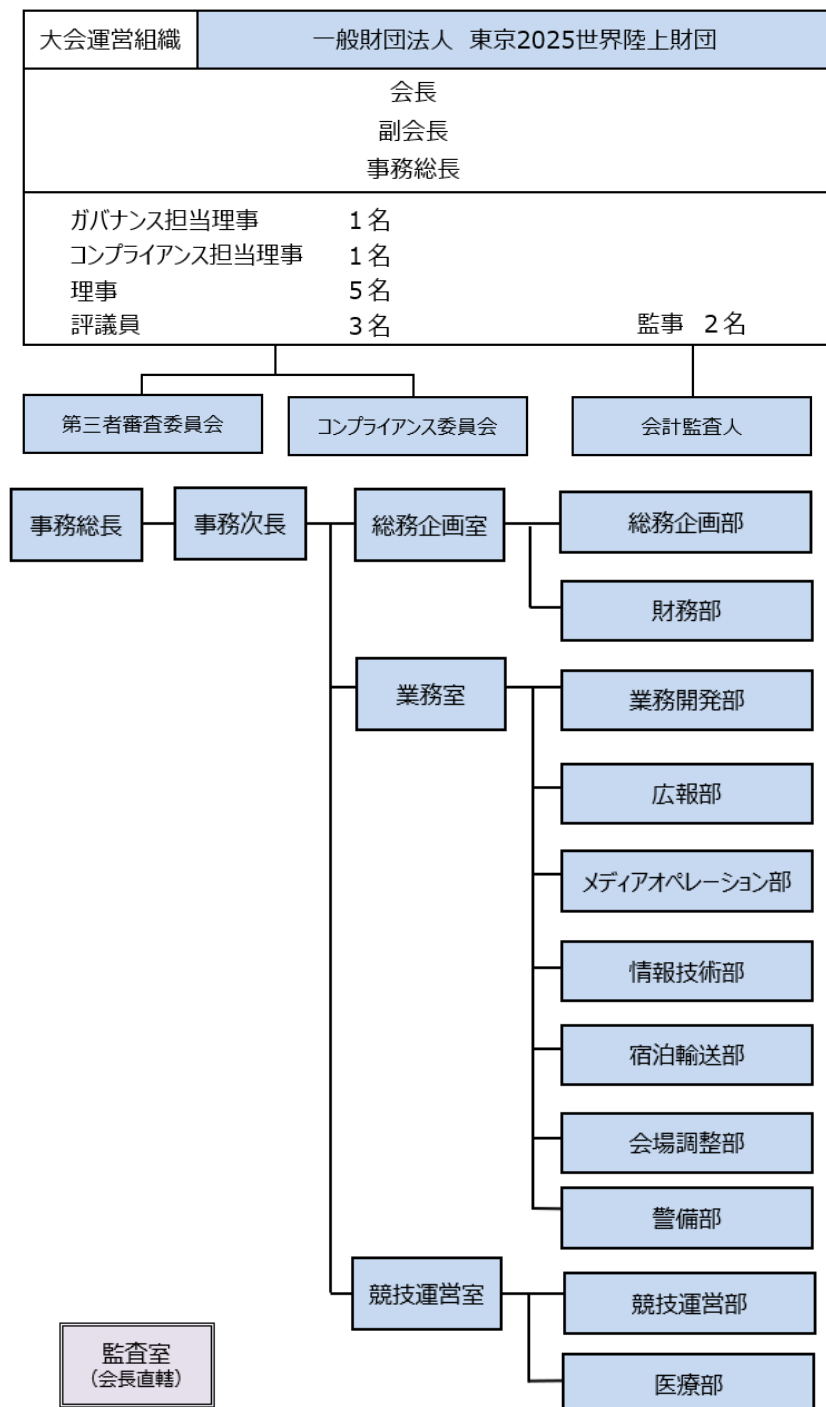


第4章 組織・運営体制

第4章 組織・運営体制

1. 組織体制

(1) 財団組織図



※2023(令和5)年7月4日
財団設立時点

(2) 人員体制

財団の構成員は、地方公共団体や競技団体等からの派遣・出向職員、そして財団により今後採用を予定する直接雇用職員など、多様なバックグラウンドを有しており、属性・契約形態も多岐にわたることが想定されます。こうした状況においても、公平・公正、透明性を確保し、フェアネスを体現した組織運営を徹底し、コンプライアンスの確保、ガバナンスの強化等に最大限努めていきます。

引き続き、大会運営に携わる必要な人材の採用・配置等を適切かつ計画的に行うとともに、必要な教育・研修等を実施し、大会を成功に導くことのできる人員体制を整備してまいります。

① 職員の採用と人事管理について

財団職員としての行動規範等に理解がある、開催準備・大会運営に必要な人材を適切なプロセスにより確保し、適材適所に配置及び管理をすることで、円滑な大会運営を目指します。

② 教育・人材育成について

すべての役職員等がコンプライアンス・ガバナンスへの理解を深めるとともに、業務を進めるうえでこれを徹底してまいります。また、将来を見据えたレガシーとしての人的資本の育成を見据え、大会成功に向けて職員個人の資質向上を図ります。



2. 運営体制（ガバナンス）

（1）財団のガバナンス確保について

大会が都民・国民に心から受け入れられるものとするため、「大規模な国際又は国内競技大会の組織委員会等のガバナンス体制等の在り方に関する指針」及び「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」を踏まえて適切なガバナンス体制を確保し、スポーツのフェアネスを体現した信頼される組織の構築に向けて、以下の取組を行います。

① 役員等の適切な選任

理事等が組織全体の運営改善に不断に取り組むとともに、その権限を適切に行使できるよう体制整備を行うため、有識者を含む役員等選考委員会の設置や選任方針の策定及び選任理由等の公表を行うとともに、役員等の行動規範の策定及び就任時の誓約書の提出並びに行動規範・誓約書の公表を実施します。

② コンプライアンスの確保

必要な体制整備に加え、役職員等のコンプライアンスに係る知識の習得や意識啓発を行うため、コンプライアンス委員会の設置や内部及び外部通報窓口の設置等の体制整備を行うとともに、役職員等への継続的なコンプライアンス教育の実施や危機管理及び不祥事対応体制並びに懲罰制度の運用を行います。

③ 内部統制・外部チェック

公正妥当と認められる会計の原則に則った会計処理を行うため、収入・支出のプロセス等を事前及び事後に監督する契約・調達委員会等を設置するとともに、監査室を中心として監事・会計監査人が連携した「三様監査体制」を構築し、リスクアプローチ手法による監査を実施します。

④ 利益相反に伴う問題の防止

利益相反を適切に管理するため、役職員等による利益相反に関する自己申告書やチェックシートの提出など、利益相反の該当性を適切にチェックいたします。また、第三者審査委員会での審査を通じて、利益相反取引等の実施や人材の採用等に係る適正性等を担保してまいります。

⑤ 情報公開

都民・国民との信頼関係を醸成するため、ホームページ等において、法定事項に加え、組織の重要な決定や世の中の関心の高い事項を積極的に発信するとともに、東京都の条例に準じた情報公開制度の運用を行います。また、第三者審査委員会での審査を通じて、審査請求に関する開示決定の適正性等を担保してまいります。



第 5 章 大会運営

第5章 大会運営

第4章に記載したガバナンス・コンプライアンスを徹底した組織・運営体制の下、財団一丸となって大会の成功に向けた運営を行っていきます。

1. 競技運営

(1) 競技運営

アスリートが競技において安全かつ最大限のパフォーマンスを発揮できるよう、アスリートセンタードに基づき、競技環境を整備し、感動と興奮で会場を包みます。

【目標達成に向けた取組】

- 競技会場、練習会場等のアスリートの競技環境や、競技スケジュール等について、適切かつ効率的に準備
- アスリート及び観客が一体となって競技の感動・興奮を共有できる大会運営を計画・実施
- 各国の陸上競技連盟への適時適切な情報共有や公正で一貫性のあるサービスを提供

(2) 医療、アンチ・ドーピング

適切な医療サービス体制を構築し、アスリート等が健康で安全に大会へ参加できる環境を提供するとともに、アンチ・ドーピングプログラムの実施によりアスリートにフェアネスの理念に基づいたクリーンな戦いの舞台を提供します。

【目標達成に向けた取組】

- 外部医療機関等と連携しながら、すべてのステークホルダーに対し、適切な医療サービスを提供
- 世界アンチ・ドーピング規程および国際基準に基づくドーピング検査の実施

2. 会場運営

(1) 会場管理

陸上の素晴らしさや感動と興奮を会場から世界へ届けるため、アスリートセンタードの視点に立ち、アスリートが最高のパフォーマンスを発揮することができる会場運営を目指すとともに、すべての観客をおもてなしの心で迎えます。

【目標達成に向けた取組】

- 大会関係者のニーズや競技スケジュール等を踏まえた最適な会場マップや動線計画の策定及び安全かつ円滑な会場運営の実施
- 競技用備品や放送用機材を適切に配置するための効率的な物流サービス、輸出入支援を実施
- 分別・リサイクルの徹底を通じた環境に配慮した大会の実現
- わかりやすい誘導表示や配慮が必要な方々への支援を通じた効果的かつ効率的な観客誘導
- ウェブサイトやSNSなどを通じた世界を視野に入れた迅速な情報伝達

(2) 施設設営等

大会を確実に運営できるよう、必要な仮施設等を効率的に整備するとともに、大会に必要なエネルギーを安定的かつ効率的に供給します。

また、アスリート、大会関係者、観客、放送関係者、プレス及びスタッフ等などに対して、快適かつ信頼性の高いテクノロジーを提供し、大会の円滑な運営を実現するとともに、都民・国民に感動体験を共有する機会を提供します。

【目標達成に向けた取組】

- 会場における必要な仮施設等の設置、維持管理、撤去計画の策定及び実施
- 会場のエネルギー需要とサービスレベルに応じた安定的なエネルギーの供給
- 大会運営に必要なシステム関連機器等の調達・管理、セキュリティを確保したネットワークの構築

3. 大会サービス

(1) 出入国

日本を訪れる世界中のアスリートや大会関係者、観客などに対して、円滑で快適な出入国サービスを提供します。

【目標達成に向けた取組】

- 大会関係者が円滑に出入国するためのサービスの提供
- ビザを要する関係者に対する円滑な入国支援

(2) 宿泊

アスリートセンタードの視点に基づき、アスリートや大会関係者のニーズを反映させることに加え、コンパクトかつ適切な宿泊施設及び付随するサービスを提供します。

【目標達成に向けた取組】

- アスリートが各会場まで約 30 分以内にアクセスできる場所に宿泊施設を確保
- その他の大会関係者の宿泊施設についても、大規模なホテルや競技会場周辺のホテルを確保し、より効果的・効率的な大会運営を実現
- 宿泊施設内にウェルカムデスクを設置し、大会に関連する情報を提供

(3) 輸送

大会関係者に対して、安全かつ迅速で円滑な移動を可能とする輸送サービスを提供するとともに、環境に配慮したサービス提供を検討します。

【目標達成に向けた取組】

- 迅速、安全かつ円滑な輸送体制の確保に向けた効率的な輸送計画の策定
- 輸送サービスの提供に際しては、環境に配慮した輸送方法の導入を検討

(4) 警備

アスリートや大会関係者、観客などに対して、大会の安全を提供します。

【目標達成に向けた取組】

- 安全の確保に向けたセキュリティオペレーション計画の策定
- メイン会場、ウォームアップ会場、練習会場など、それぞれのリスクに応じた効果的な警備の実施

(5) 飲食

環境や多様性にも配慮した適切な飲食サービスを提供します。

【目標達成に向けた取組】

- 大会関係者等に対する適切な飲食サービスを提供
- 必要食数の精査や提供の仕方の工夫等を通じてフードロスを削減
- 多様な食習慣に配慮した飲食を提供

4. ボランティア

ボランティアの参加は、大会をみんなで創り上げていくために必要不可欠な存在だと私たちは考えています。大会を成功に導くうえで、様々なボランティアが、大会のあらゆる場面で活躍することが重要です。

大会運営に積極的な関わり合いをもち、ともに楽しみたいという方々の気持ちを尊重し、様々な場面における活動機会を提供することで、みんなで大会を創り上げ、そうした経験が自己実現に繋がるよう取り組んでいきます。

そして、東京2020大会を契機に浸透しつつあるボランティア文化の一層の発展を図り、レガシーとして継承していきます。

【目標達成に向けた取組】

- 適切な選考及び採用の実施
- 充実した活動となるような研修・交流等の機会提供



©Getty Images for World Athletics



©Getty Images for World Athletics

5. 広報

広報活動を通じて大会の価値を広く世界へ発信し、大会を成功へ導いていきます。また、戦略的な広報により、国内外の人々が様々な形で大会に参加することを促し、スポーツの力を活用した大会レガシーの最大化と次世代への継承に貢献します。

【目標達成に向けた取組】

- フルスタジアムの実現に向けた広報戦略の策定
- ウェブサイトや SNS 等による情報発信及び PR 活動の実施

6. メディア運営

ブロードキャスト、プレスやカメラに対して円滑にサービスを提供するためのオペレーション計画を策定します。大会の報道露出を高め、世界陸上の価値を最大化するため、適切な取材環境及びメディアオペレーションに関するサービスを提供します。

【目標達成に向けた取組】

- ブロードキャスト、プレスやカメラのオペレーションの調整
- メディアセンター、ミックスゾーン、記者会見室、インタビューエリアや関連するロジスティクスなどを含む運営計画の策定
- メディアオペレーションに必要な設備などの調達



7. マーケティング

(1) ブランド

大会ビジョンを体現する、一貫性のあるブランドアイデンティティ、ルックを創り出すとともに、大会の素晴らしさを世界中に披露し、世界陸上のブランド価値を高めていきます。

【目標達成に向けた取組】

- ブランドアイデンティティ、ロゴ、グラフィックス、カラーパレット、スタイルガイド等を策定
- 大会ロゴなどブランド資産の管理
- 会場などの装飾の計画・実施
- メダルのデザイン制作

(2) コマーシャルオペレーション

スポンサーシップ（企業協賛）を通じて、大会運営に必要な収入を確保するとともに、企業・団体や人々を大会に結び付け、陸上、スポーツの楽しさ、素晴らしさを広めていきます。また、スポンサーが多様な活動を行うための場所と機会を提供・創出し、その活動を支援することで、みんなが参画し、みんなでつくる大会を実現します。

【目標達成に向けた取組】

- スポンサーシップ販売方針の策定
- スポンサーの獲得
- スポンサーの権利の管理

(3) 権利保護

財団が開発した大会のロゴ、ルック等、世界陸上の知的財産を保護します。また、大会のブランド価値を更に高めていくために、WA スポンサー、放送権者、イベントスポンサー、ライセンサー等に許諾した知的財産の使用権利などを保護します。

【目標達成に向けた取組】

- 権利者保護プログラム、各種マニュアルの策定
- 便乗広告や偽造商品の事前防止や、発生時の対処方法等の検討
- クリーンベニューの推進

8. チケット販売

みんなに大会を直接体験できる機会を提供し、観客とアスリートが一体となった会場を創出するとともに、販売収益を通じて、財団の収入を確保します。また、こどもにより多くの大会観戦の機会等を提供することで、大会への思い出を未来に繋げていきます。

【目標達成に向けた取組】

- チケット販売計画の策定、価格の設定
- 多くのこどもの観戦機会の確保に向けた取組の実施
- 戦略的な国内外販売の展開

9. プロトコール・ホスピタリティ

大会関係者に対して東京の魅力を発信し、東京と世界各国との絆を深めていきます。

【目標達成に向けた取組】

- 各種会議などの着実な実施
- ホスピタリティ計画に基づく来賓への適切な接遇

- デフリンピックは国際ろう者スポーツ委員会が主催し、夏季と冬季それぞれ4年毎に開催されるデフアスリートを対象とした国際大会である
- 日本では初めての開催であり、また1924年にパリで第1回大会が開催されてから100周年となる、歴史に残る大会である
- 本大会の運営にあたっては、適切なガバナンス体制を確保するとともに、この大会の開催を契機に、デフリンピックやデフスポーツへの理解のすそ野を広げ、障害のあるなしに関わらず、共にスポーツを楽しみ、互いの違いを認め、尊重しあう共生社会づくりに貢献していく

資料3-1

大会概要

正式名称	第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025 (略称) 東京2025デフリンピック
期間	2025年11月15日～26日 (12日間)
参加国	70～80か国・地域
参加者数	各国選手団等：約6,000人 (選手約3千人、ICSD役員・SD・審判・スタッフ約3千人)

大会エンブレム



人々の繋がりを意味する「輪」をテーマに、デフコミュニティの代表的なシンボルである「手」を表している。デフリンピックを通して「輪」が繋がった先には、新たな未来の花が咲いていくことを表現した。

大会ビジョン

1. デフスポーツの魅力や価値を伝え、人々や社会とつなぐ
2. 世界に、そして未来につながる大会へ
3. “誰もが個性を活かし力を発揮できる” 共生社会の実現

競技会場等

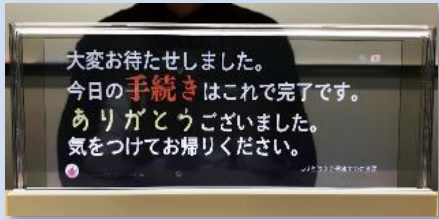
	競技名	会場
0	開閉会式	東京体育館
1	陸上	駒沢オリンピック公園総合運動場 陸上競技場 等
2	バドミントン	武蔵野の森総合スポーツプラザ
3	バスケットボール	大田区総合体育館
4	ビーチバレーボール	大森東水辺スポーツ広場
5	ボウリング	東大和グランドボウル
6	自転車 (ロード)	日本サイクルスポーツセンター
7	自転車 (MTB)	日本サイクルスポーツセンター
8	サッカー	Jヴィレッジ
9	ゴルフ	若洲ゴルフリンクス
10	ハンドボール	駒沢オリンピック公園総合運動場 屋内球技場

	競技名	会場
11	柔道	東京武道館
12	空手	東京武道館
13	オリエンテーリング	日比谷公園、伊豆大島
14	射撃	味の素ナショナルトレーニング センター・イースト
15	水泳	東京アクアティクスセンター
16	卓球	東京体育館
17	テコンドー	中野区立総合体育館
18	テニス	有明テニスの森
19	バレーボール	駒沢オリンピック公園総合運動場 体育館
20	レスリング (フリースタイル)	府中市立総合体育館
21	レスリング (グレコローマン)	府中市立総合体育館

「シンプルで心に残る大会」をめざすとともに、全ての人が輝くインクルーシブな街・東京の実現に貢献

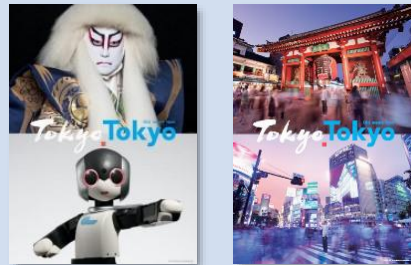
みんなが つながる

東京2020大会で使用された様々なデジタル技術も活用して、「誰もが円滑につながる大会」を実現。「誰もが大会を楽しめる技術」の開発や、デフリンピックスクエアで技術の展示・PRを行う。



世界の人々が 出会う

選手や関係者などを、おもてなしの心で迎え、**芸術文化や食、観光資源**など、東京の持つ魅力を感じてもらい、世界との絆を深めていく。



子どもたちが 夢をみる

都内や被災地の**子どもの競技観戦**や、選手入場時の**エスコートキッズ**などの機会を設け、デフスポーツの魅力を感じてもらおうとともに、またとない経験を届ける。



未来へ つなぐ

デフスポーツやろう者の文化への**理解促進**、環境への配慮などに取り組むことで、「未来につながる大会」を実現。



みんな で 創る

デフアスリートなどとともに大会計画を検討。**多様な人々がボランティアとして活躍**できる機会を設けるなど、多くの都民・国民の理解と参画のもと、大会を創り上げる。



大会の意義を都民・国民に発信するとともに、大会の開催気運を盛り上げていくための様々な取組を展開していく

大会の意義や魅力を伝える

応援アンバサダーなどを通じ、大会の意義や魅力を伝える。大会エンブレムを用いた広報PRツールの活用、**デフアスリートと子供たちとの交流**や競技体験など、大会への関心を高める取組を幅広く展開。



東京2025デフリンピック応援アンバサダー

共生社会について考える

ろう者の文化を身近に感じてもらえるよう、**デフアスリートの活躍やろう者の社会活動を紹介**。手話単語を簡単に学べる**動画**やデフリンピックなどをテーマとした**ハンドブック**を制作し、様々な機会に活用・発信。



サポートの輪を広げる

競技団体、区市町村、当事者団体などと連携した取組の展開や、**寄附・クラウドファンディング**など、より多くの人々が参画し、大会を創っていくための仕組みづくりを進める。



競技	国内デフ競技団体はもとより、国内の各競技団体から協力を得ながら連携体制を構築し、協議の上、競技を運営していく。
式典	東京2025デフリンピックならではの体験を得られる機会を提供するとともに、世界中の様々な人々にデフリンピックの魅力を広く発信する。
デフリンピックスクエア	選手が各種サービスの提供を受けられるとともに、選手同士の交流などができる拠点として、デフリンピックスクエアを設置する。
輸送・宿泊	選手団及び大会関係者に対して、安全、円滑、確実な輸送サービス、競技に集中できる宿泊サービスを手配する。



第25回
夏季デフリンピック競技大会 東京2025
開催基本計画

一般財団法人全日本ろうあ連盟
東京都
公益財団法人東京都スポーツ文化事業団

はじめに

01

大会ビジョン (1ページ)

- デフスポーツの魅力や価値を伝え、人々や社会とつなぐ
- 世界に、そして未来につながる大会へ
- “誰もが個性を活かし力を発揮できる”共生社会の実現

02

デフリンピック (2ページ)

- デフリンピックについて
- ICSDロゴ/デフリンピックマーク

03

大会概要 (3～4ページ)

- 名称/期間/参加国/参加者数/大会会場、施設
- 大会エンブレム

04

競技会場 (5～6ページ)

- 競技会場
- 競技会場図

05

デフリンピックを通してめざすもの (7～12ページ)

- みんなが つながる
- 未来へ つなぐ
- 世界の人々が 出会う
- みんなで 創る
- こどもたちが 夢をみる

06

みんなで大会を盛り上げる (13～16ページ)

- 大会の意義や魅力を伝える
- 共生社会について考える
- サポートの輪を広げる

07

大会運営体制 (17～19ページ)

- 運営体制
- リスク管理
- ガバナンスの確保
- 持続可能性
- 運営要員

08

大会運営 (20～25ページ)

- 競技
- デフリンピックスクエア
- 式典
- 広報
- 聴力検査
- 輸送
- アンチ・ドーピング
- 宿泊
- IDカード
- 飲食
- 医療サービス
- 会場警備
- 清掃/廃棄物

はじめに

デフリンピックは国際ろう者スポーツ委員会(ICSD:International Committee of Sports for the Deaf)が主催し、夏季と冬季それぞれ4年毎に開催されるデフアスリートを対象とした国際総合スポーツ競技大会である。

2022年9月9日、10日にオーストリア(ウィーン)で開かれたICSD総会において、一般財団法人全日本ろうあ連盟が2025年デフリンピックの開催地に立候補し、多くの支持を得て東京開催が正式決定した。

日本では初めての開催であり、また1924年にパリで第1回デフリンピックが開催されてから100周年となる、歴史に残る大会である。

このたび、一般財団法人全日本ろうあ連盟、東京都及び公益財団法人東京都スポーツ文化事業団は、「開催基本計画」を策定した。

この計画は、2023年8月に公表した大会ビジョンに加え、競技や会場の運営など、大会を支える業務から構成され、大会開催に向けた必要な準備やサービスレベルの考え方を示したものである。

今後、この「開催基本計画」の考え方をもとに、具体的なサービスレベルや各業務の計画を作成し、大会の成功や大会後のレガシーの構築に向けて準備を確実に進めていく。

そして、この記念すべき大会の開催を契機に、デフリンピックやデフスポーツへの理解のすそ野を広げ、障害のあるなしに関わらず、共にスポーツを楽しみ、互いの違いを認め、尊重しあう共生社会づくりに貢献していく。

01 大会ビジョン

1

デフスポーツの魅力や価値を伝え、
人々や社会とつなぐ

- デフアスリートを主役に、最高のパフォーマンスを発揮できるよう大会準備を進め、その姿を通じて、本来、スポーツが持っている素晴らしさとともに、デフリンピックやデフスポーツの魅力や価値を発信し、普及・啓発に努める。
- また、あらゆる人が協働した大会運営や子どもたちの参画など、多様な視点を大切にしたい大会運営をめざす。

2

世界に、
そして未来につながる大会へ

- 大会を通じた手話言語の理解・普及・拡大など従来からの情報保障の推進・強化に加え、デジタル技術を活用した、新しいコミュニケーションツール等の開発、社会への普及を促進する。
- このような取組を通して、国籍や障害のあるなしに関わらず、誰もが心を通わせることのできる街・東京の魅力を感じてもらい、世界との絆を深めていく。

3

“誰もが個性を活かし力を発揮できる”
共生社会の実現

- 大会開催を機に、デフリンピック・ムーブメントとして、デフスポーツやろう者の文化への理解を促進し、障害のある人とない人とのコミュニケーションや心・情報・街のバリアフリーをさらに推進する。
- このムーブメントを通して、互いの違いを認め、尊重しあい、誰もが個性を活かし力を発揮できる共生社会づくりに貢献する。

02 デフリンピック

デフリンピックについて

- ICSDが主催し、夏季と冬季それぞれ4年毎に開催されるデフアスリートを対象とした国際総合スポーツ競技大会である。
- 第1回は、1924年フランスのパリで開催された。
- 「デフリンピック」の名称は、2001年に国際オリンピック委員会(IOC)が承認した。
- 競技は一般の競技ルールに準拠するが、競技場に入った時点から、補聴器等の使用は禁止されることや、競技運営に国際手話のほか、スタートランプや旗などを利用した視覚による情報保障を用いることが特徴である。

最近の過去大会

夏季大会

2021 カシアス・ド・スル(ブラジル)
2017 サムスン(トルコ)
2013 ソフィア(ブルガリア)

冬季大会

2024 エルズルム(トルコ) ※開催予定
2019 ヴァルテッリーナ(イタリア)
2015 ハンティ・マンシースク(ロシア)

ICSDロゴ



手の形が「OK」「GOOD」「GREAT」を意味するサインが重ねられており、それはまた「デフリンピック」の手話単語を表している。さらに「結束」を表現している。

ロゴマークの中央は「目」を表しており、ろう者が視覚中心の生活を営んでいることを示している。また、赤色、青色、黄色、緑色はアジア太平洋、ヨーロッパ、全アメリカ、アフリカの4つの地域連合を表現している。

デフリンピックマーク



DEAFLYMPICS

「ICSDのロゴ」と「DEAFLYMPICS」の文字列を組み合わせたもの。

03 大会概要

名称

日	正式名称	第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025
	略称	東京2025デフリンピック
英	正式名称	25th Summer Deaflympics Tokyo 2025
	略称	TOKYO 2025 DEAFLYMPICS

期間

2025年11月15日～26日(12日間)
開会式：11月15日 閉会式：11月26日

参加国

70～80か国・地域

参加者数

各国選手団等：約6,000人
(選手約3,000人、ICSD役員・SD・審判・スタッフ約3,000人)

大会会場、施設

競技会場、開閉会式会場(東京体育館)、
練習会場、デフリンピックスクエア等

03 大会概要

大会エンブレム

国内唯一の聴覚障害者、視覚障害者のための大学である、国立大学法人筑波技術大学の総合デザイン学科を中心とした産業技術学部の学生がエンブレムのデザイン案を複数制作し、ろう学校を含む都内中高生の投票により決定した。

コンセプト



TOKYO 2025
25TH SUMMER DEAFLYMPICS

- 人々の繋がりを意味する「輪」をテーマとした。
- デザインでは、デフコミュニティの代表的なシンボルである「手」を表し、デフリンピックを通して競技と話題に触れ、互いの交流やコミュニティが「輪」のように繋がった先には、新たな未来の花が咲いていくことを表現。花は桜の花弁をモチーフとした。
- デフアスリート同士の繋がり、観客や子どもたちとの繋がりなど様々な繋がりや輪をイメージし、子どもたちに楽しく描いてもらえるように1本の線で制作した。

04 競技会場

過去大会の出場者数や競技運営の実績を考慮し、大会に最適な会場を選定した。

	競技名	会場
1	陸上	駒沢オリンピック公園総合運動場 陸上競技場 等
2	バドミントン	武蔵野の森総合スポーツプラザ
3	バスケットボール	大田区総合体育館
4	ビーチバレーボール	大森東水辺スポーツ広場
5	ボウリング	東大和グランドボウル
6	自転車(ロード)	日本サイクルスポーツセンター
7	自転車(MTB)	日本サイクルスポーツセンター
8	サッカー	Jヴィレッジ
9	ゴルフ	若洲ゴルフリンクス
10	ハンドボール	駒沢オリンピック公園総合運動場 屋内球技場
11	柔道	東京武道館

	競技名	会場
12	空手	東京武道館
13	オリエンテーリング	日比谷公園、伊豆大島
14	射撃	味の素ナショナルトレーニングセンター ・イースト
15	水泳	東京アクアティクスセンター
16	卓球	東京体育館
17	テコンドー	中野区立総合体育館
18	テニス	有明テニスの森
19	バレーボール	駒沢オリンピック公園総合運動場 体育館
20	レスリング (フリースタイル)	府中市立総合体育館
21	レスリング (グレコローマン)	府中市立総合体育館

04 競技会場

競技会場図



05 デフリンピックを通してめざすもの

誰もがアスリートの活躍を間近で感じることができる。あらゆる人が参画・協働して一緒に大会を創る。「シンプルで心に残る大会」をめざし、この大会を、サステナブルなスポーツ大会のモデルとして、今後のスポーツ大会に活かしていきたい。

大会を通じて都がめざす姿をまとめた「ビジョン2025 スポーツが広げる新しいフィールド」を踏まえ、全ての人々が輝くインクルーシブな街・東京の実現に貢献する。



05 デフリンピックを通してめざすもの

みんなが つながる

手話言語に対する理解の促進などに取り組むとともに、国籍や障害にかかわらず、スムーズなコミュニケーションを実現する様々なデジタル技術も活用して、「誰もが円滑につながる大会」を実現する。また、東京2020大会で使用された技術を活用することに加えて、大会を契機とした新たな技術開発や、大会における技術活用状況の発信などを通じて、ユニバーサルコミュニケーションを社会に浸透させていく。

情報保障やコミュニケーションの充実

- デフスポーツに必要なスタートランプなどの機器に加え、ビジョンやサイネージなどを活用する。
- 競技会場内の案内表示・掲示は誰もがわかりやすい表示とする。
- 東京2020大会で使用された多言語翻訳や音声文字化などのデジタル技術を活用するとともに、国際手話人材の育成にも取り組み、選手や関係者の円滑なコミュニケーションをサポートする。

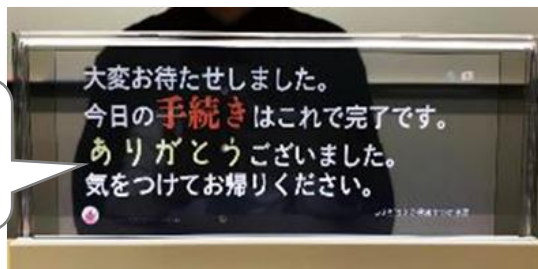
新しい技術の開発

- 最新技術の調査・発掘を行うとともに、民間事業者などと連携し、様々な機会を捉えて技術の実証を行う。
- スタートアップ企業との連携により、競技の音を擬音で表示するなど、「誰もが大会を楽しめる技術」の開発などに取り組む。

大会における技術活用状況などの発信

- 大会でデジタル技術を活用している様子を広く発信する。
- 選手同士の交流や、都民・国民が大会を体感できる拠点となる「デフリンピックスクエア」において、技術の展示やPRを行う。

音声を多言語で文字化するアプリや透明ディスプレイも活用して、円滑にコミュニケーション



競技の音を擬音で表示する技術などを活用し、誰もが大会を楽しめるように

05 デフリンピックを通してめざすもの

世界の人々が 出会う

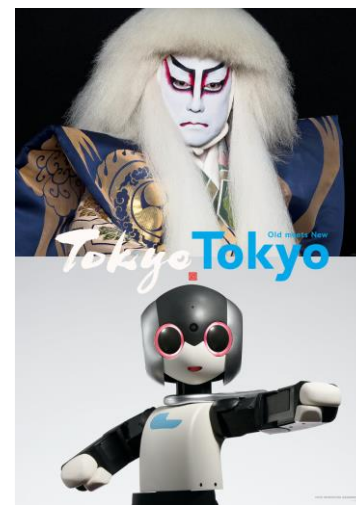
世界中から集まる選手や関係者などを、おもてなしの心でお迎えするとともに、芸術文化や食、観光資源など、東京の持つ多彩な魅力を感じてもらい、世界との絆を深めていく。

様々なおもてなし

- 魅力あふれる多彩な競技施設や整備された交通網を活用するとともに、ボランティアによる手話言語対応も含めた心のこもったコミュニケーションなどにより、選手や関係者をお迎えする。
- 国籍や障害のあるなしに関わらず、あらゆる人に大会の持つメッセージを届けられるよう、発信の場面や手法などを工夫していく。

大会を彩る取組

- 大会を契機に日本を訪れるあらゆる人が楽しめる芸術文化の取組を展開し、共生社会に向けたメッセージを発信していく。
- 東京産の魅力あふれる食材を大会関連イベントで活用するなど、大会に関連した様々な場面で、東京の魅力をPRしていく。



05 デフリンピックを通してめざすもの

こどもたちが 夢をみる

子どもたちにデフスポーツの特徴や魅力を感じてもらう取組を行うとともに、大会の一員として活躍する機会やデフアスリートと交流する機会を設けることにより、全ての子どもたちの学びや成長をサポートしていく。

大会を通じた学び

- 都内や被災地の子どもたちが、会場で熱戦を間近で観たり、デフアスリートと交流したりすることで、スポーツの素晴らしさや共生社会の大切さを学ぶ機会を設ける。
- デフアスリートが学校を訪問し、子どもたちと交流する機会や、大会関連イベントを通じてデフスポーツを体験する機会を設ける。

またとない経験を子どもたちに

- 大会の象徴となるエンブレムのデザイン選定や、選手入場時のエスコートキッズなど、子どもたちが大会にとって大切な役割を担う機会を設けることで、他では得られない経験を子どもたちに届け、その成長をサポートする。
- 大会関連イベントを通じて、選手へのメッセージを送るなど、子どもたちと一緒に大会を盛り上げる。



05 デフリンピックを通してめざすもの

未来へ つなぐ

デフスポーツやろう者の文化への理解促進、環境への配慮などに取り組むことで、「未来につながる大会」を実現する。

共生社会の大切さを学ぶ

- 大会に向けて、障害のあるなしに関わらず、一緒にスポーツを楽しむイベントの展開や、ろう者の文化への理解につながるハンドブックの作成などを通じて、人権や多様性について考える機会を設ける。

環境への配慮

- 既存施設や物品をできるだけ活用し、調達が必要な場合でもリースやレンタルを基本とするなど、脱炭素化と3Rの推進に努め、環境に配慮した大会運営を行う。



05 デフリンピックを通してめざすもの

みんなで 創る

当事者の目線を踏まえて大会計画を策定するとともに、ボランティアをはじめ、多くの都民・国民の理解と参画のもと、大会を創り上げていく。

様々な連携

- 多様な視点や当事者の目線を計画に反映できるよう、デフアスリートなどとともに大会の計画を考えていく。
- 大会の準備運営にあたっては、国内・都県の競技団体や関係自治体と効果的に連携していく。

多様な人々の参画

- 障害のあるなしや年齢などに関わらず、多様な人々がボランティアとして活躍できる機会を設けることで、東京2020大会を通じて広がったボランティア文化をさらに根付かせていく。
- 大会を支える人々の努力や、ろう者が社会で活躍する姿などをウェブサイトで発信する。
- エンブレムの作成や「東京2025デフリンピック応援アンバサダー」など、当事者の協力も得ながら大会の気運醸成に取り組んでいく。



06 みんなで大会を盛り上げる

デフスポーツへの理解のすそ野を広げ、障害のあるなしに関わらず、共にスポーツを楽しみ、互いの違いを認め、尊重しあう共生社会づくりに貢献していく。

デフリンピックのこうした意義をあらゆる機会を捉えて都民・国民に発信するとともに、大会の開催気運を盛り上げていくため、様々な取組を展開していく。



06 みんなで大会を盛り上げる

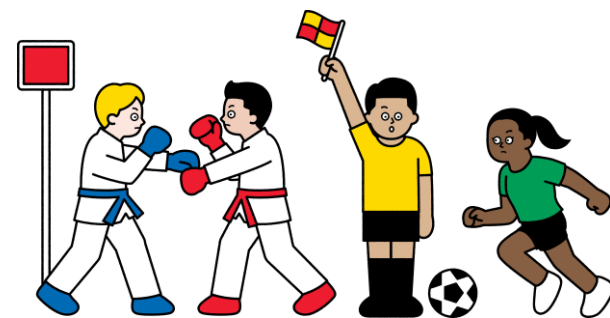
大会の意義や魅力を伝える

多くの都民・国民に大会に参画してもらえよう、デフリンピックの歴史や特徴、魅力などをわかりやすく伝えるとともに、大会への関心を高める取組を幅広く展開していく。

また、大会の持つメッセージなどを効果的に発信するため、同じく2025年に東京で開催される世界陸上競技選手権大会とも、相乗効果を発揮しながら取り組んでいく。

「デフリンピック」を伝える

- ・ デフスポーツやろう者の活躍などについて知るきっかけをつくり、デフリンピックへの興味・関心を高めてもらえるよう、訴求力のあるホームページやSNSなどを通じ、広く発信する。
- ・ デフスポーツや手話言語に理解のある人や発信力のある人を「東京2025デフリンピック応援アンバサダー」として起用し、大会の意義や魅力、スポーツの素晴らしさなどを積極的に伝えていく。
- ・ 大会エンブレムを用いた様々な広報PRツールを活用し、大会の意義や魅力を効果的に発信していく。



イラストを活用した特設ホームページ

効果的な発信

- ・ 大会への注目度が高まる開催1年前の節目などの機会を捉えて、区市町村などとも連携しながら、様々な広報や気運醸成イベントなどを展開する。
- ・ デフアスリートと子どもたちとの交流、デフリンピックの競技体験など、実際に大会の特徴や魅力を感じられる取組を実施する。



長濱ねる



川俣郁美



KIKI

東京2025デフリンピック応援アンバサダー

06 みんなで大会を盛り上げる

共生社会について考える

大会を通じてデフスポーツやろう者の文化への理解を促進させ、障害のあるなしや年齢などに関わらず、誰もが互いの違いを認め、尊重しあう社会への歩みを進めていく。

ろう者の文化を身近に

- デフアスリートの活躍や、ろう者の社会活動の様子などをホームページで紹介することで、ろう者の文化を身近に感じてもらい、共生社会について考えを深めるきっかけとする。
- 子どもを含めた幅広い世代が手話言語に親しみを持てるよう、手話単語を簡単に学べる動画や、手話言語やデフリンピックをテーマとしたハンドブックを制作し、各種イベントなど、様々な機会に活用・発信していく。

芸術文化を通じた発信

- 大会を契機に日本を訪れるあらゆる人が楽しめる芸術文化の取組を展開し、共生社会に向けたメッセージを発信していく。



06 みんなで大会を盛り上げる

サポートの輪を広げる

大会の成功に向け、関係団体や区市町村などと連携した取組を展開するとともに、より多くの人々が参画し、みんなで力をあわせて大会を創っていくための仕組みづくりを進めていく。

様々な連携

- 大会の準備運営にあたっては、国内や都県の競技団体などとも連携していく。
- 区市町村が主催するスポーツイベントにおける大会PRなど、自治体と連携した取組を展開していく。
- 地域当事者団体とも協力・連携するなど、サポートの輪を広げていく。

多くの人々が参画する仕組みづくり

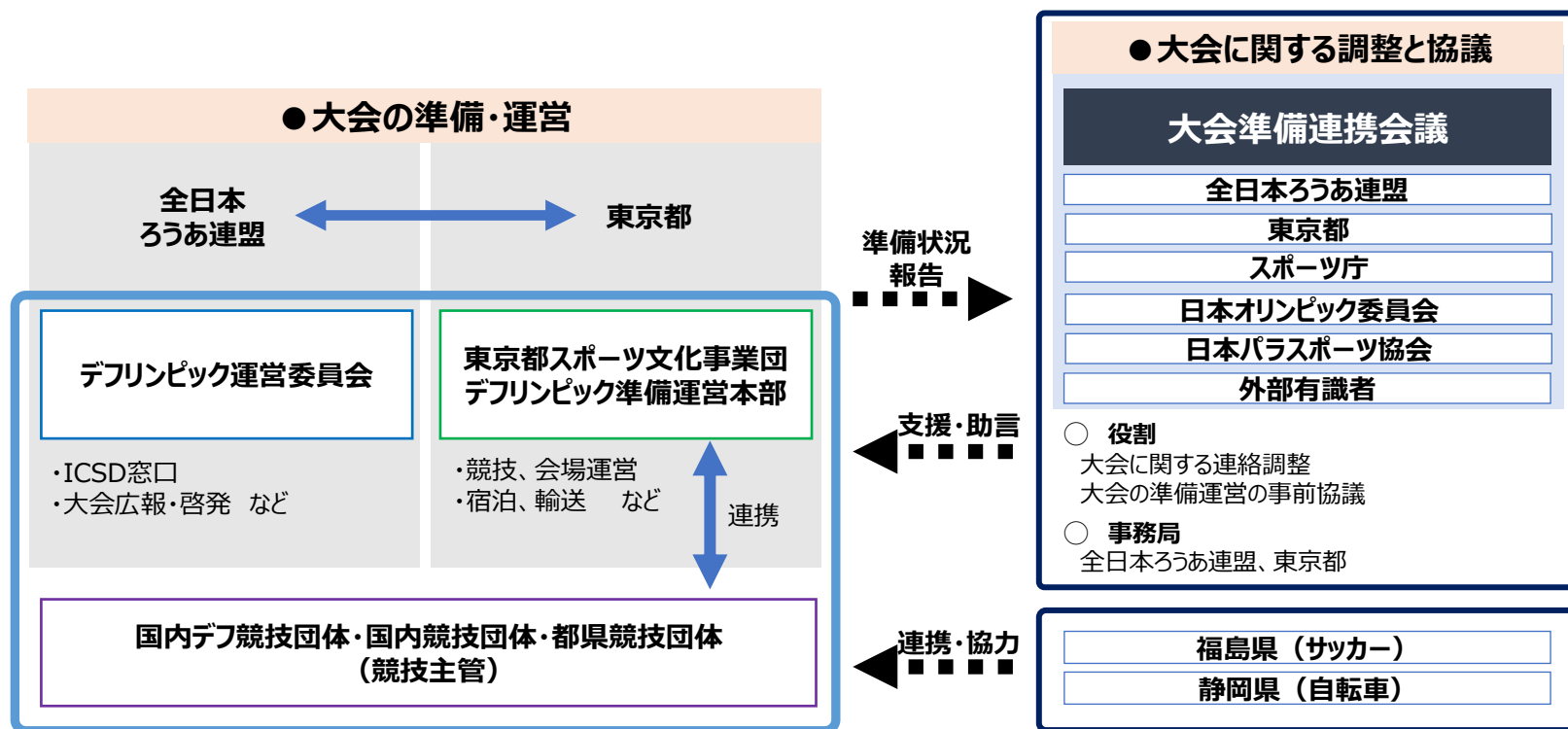
- 企業などのサポートを得て、デフリンピックの魅力を広めていく。
- 寄附やクラウドファンディングなど、多くの方々が参画しやすい仕組みづくりを進めていく。



07 大会運営体制

運営体制

- 全日本ろうあ連盟と東京都は協定を締結し、大会準備運営に係る業務を分担する。
- この分担に基づく業務を遂行するため、大会開催に係る国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)の窓口などを担う組織を全日本ろうあ連盟の内部に設置。競技、会場運営などの運営実務は東京都スポーツ文化事業団が担う。
- 大会の経験やノウハウをレガシーとして継承し、さらなるスポーツ振興に貢献していく。



07 大会運営体制

ガバナンスの確保

デフリンピックが都民・国民に心から歓迎されるものとするため、「大規模な国際又は国内競技大会の組織委員会等のガバナンス体制等の在り方に関する指針」及び「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」を踏まえて適切なガバナンス体制を確保し、スポーツのフェアネスを体現した組織を構築する。

▶ 役員等の適切な選任

役員等の資質や役割、外部理事等の目標割合を定めた役員選任方針を策定するとともに、役員等が組織運営における職責や関係法令等を認識するような役員行動規範を策定し、誓約書を徴取する。

▶ 内部統制・外部チェック

契約・調達の適正性等をチェックする契約・調達管理会議を設置するとともに、内部監査部門と監事・会計監査人が連携した「三様監査体制」を構築する。

▶ 情報公開

ホームページ等において、法定事項のみならず大会運営に関する様々な情報を積極的に公表するとともに、東京都の条例に準じた情報公開制度を整備し、適切に運用する。

▶ コンプライアンスの確保

外部有識者を含むコンプライアンス委員会の設置や内部及び外部通報窓口の設置等の体制整備を行うとともに、コンプライアンスに係る知識の習得や意識啓発のため、役職員へ継続的にコンプライアンス教育を実施する。

▶ 利益相反の管理

利益相反取引を適切に管理するための規程を制定するとともに、役職員に利益相反取引に係る自己申告書やチェックシートを提出させるなど、利益相反該当性を適切にチェックできる仕組みを構築する。

07 大会運営体制

運営要員

大会運営に携わる人材の確保・配置等を計画的に行い、大会を成功に導くことのできる体制を構築する。

- ・ 職員や競技運営スタッフ、手話言語通訳、ボランティアなど多様な人材により運営する。
- ・ 特にボランティアについては、東京2020大会のレガシーも活用し、様々な場面で活動機会を提供する。
- ・ 大会運営に必要な知識・能力などを身に付けられるよう、手話言語をはじめとした実践的な研修を実施する。

リスク管理

危機管理体制の構築及び危機発生時に適切に対応する。

- ・ 大会準備期間、大会本番時も含めた危機管理体制を関係者で組織し、危機発生時は、関係者で協議の上、合意のもと措置を講ずるものとする。

持続可能性

大会を計画、運営するにあたり、持続可能性に配慮したスポーツ大会の実現を目指す。

- ・ 物品等の調達に当たっては、可能な限りリースやレンタルを活用し、購入する場合は、環境への負荷ができるだけ少ないものを選択して購入することとする。
- ・ 障害のある人となない人のコミュニケーションや情報バリアフリーを推進し、共生社会の実現に貢献する。

競技

あらゆる人が協働した大会運営をめざすため、国内デフ競技団体(NDF)はもとより、国内競技連盟(NF)など、国内の各競技団体から協力を得ながら連携体制を構築し、協議の上、競技を運営していく。

▶ 競技運営体制

各競技の競技運営責任者(スポーツリエゾンオフィサー)を配置し、ICSDのSD(スポーツディレクター)との連携、協働が円滑に行える運営体制を整える。

▶ 競技エントリー

競技エントリーの受付はICSDが行う。2023年5月に団体競技の予備登録を受け付けており、各競技種目の出場選手数を記入した予備登録は大会の1年以上前にICSDに提出する。

▶ 競技種目

各競技で実施する種目は、2024年5月頃にICSD執行委員会の承認を受け、決定予定。

▶ 競技関連用具

競技運営に必要な用具の種類や数量を把握し、競技関連用具(情報保障機器も含む)を確保する。

なお、各競技における視覚情報保障機器(例:陸上、水泳のスタートランプなど)の基準や規格等について、SDと協議する。

▶ 選手団向け大会サービスガイド

大会の1年前に開催する選手団長セミナーにあわせ、大会情報等を網羅した選手団向け大会サービスガイドを作成し、選手団長に提供する。

▶ 競技結果報告書

大会終了後に、大会記録リストの競技種目と分類レベルにあわせて、全予選及び決勝の結果に関する競技結果報告書を発行する。

▶ リザルト関係

各競技会場において、選手や観客のために、得点掲示板、計時・計測や判定結果等の情報が視覚的に得られる機器を導入し、各競技会場に設置する。また、大会ホームページ等を通じて、競技会場外においても競技結果を確認できるよう、情報を提供する。

08 大会運営

式典

大会のセレモニーを通じて、東京2025デフリンピックならではの体験を得られる機会を提供するとともに、世界中の様々な人々にデフリンピックの魅力を広く発信する。

- 東京2025デフリンピックらしさを反映させたセレモニーを執り行う。
- 開閉会式においては、大会ビジョンを反映させた演出内容とし、デフリンピックの魅力や価値を伝え、共生社会の実現につながる式典とする。
- 表彰式においては、東京2025デフリンピックらしい創意工夫を凝らすことにより、入賞者の功績を称えるのにふさわしい雰囲気を出創する。

聴力検査

聴力検査の実実施計画を策定し、聴力検査を実施する。

- 関係機関と協力体制を構築し、ICSDの方針を踏まえ、聴力検査の実実施計画を策定する。
- 聴力検査に必要な人員や場所、検査機器等を確保する。
- 情報保障に配慮し、適切かつ円滑に聴力検査を実施する。

アンチ・ドーピング

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構(JADA)等と連携し、ドーピングコントロールを実施する。

- ICSDの方針を踏まえ、JADAをはじめ、関係機関と連携の上、ドーピングコントロールの運用計画を策定する。
- ドーピングコントロールに必要な人員や場所を確保する。
- 情報保障に配慮し、適切かつ円滑にドーピングコントロールを展開する。

08 大会運営

IDカード

大会運営を円滑にするために、選手団及び大会関係者にIDカードを発行する。

- IDカードには大会運営に必要な身分証明等の情報を含んだものを発行する。
- 個々の大会関係者の情報を確認し、競技会場等で必要となるアクセス権をそれぞれ付与する。
- IDカード登録申請の手続から発行までを、円滑な方法で実施する。

デフリンピックスクエア

大会期間中、選手が各種サービスの提供を受けられるとともに、選手同士の交流などができる拠点として、デフリンピックスクエアを設置する。

- 団長会議の開催や文化体験、交流コーナーなど、選手団向けのサポートを行う。
- メディア向けの大会情報の発信拠点としてサービス提供を行う。
- 選手団及び大会関係者に対して提供する輸送や宿泊サービスを統括する機能などを設置する。
- 子どもたちを含めた都民・国民がデフリンピックを体感できるような機会を提供する場の設置を検討する。

広報

デフリンピックの感動や素晴らしさを伝えられるよう、国内外に向けて大会の状況を適宜発信するとともに、メディアに対して競技結果などの必要な情報を提供し、報道活動を支援していく。

- 各競技の映像等をオンラインで視聴できる環境を整備する。
- 大会運営状況や競技結果等を提供する記者会見等を実施する。
- メディアが必要な情報を随時収集できる場を設置するとともに、各競技会場においても取材活動に資する環境を整備する。

08 大会運営

輸送

選手団及び大会関係者に対して、安全、円滑、確実な輸送サービスを提供する。

- 安全かつ円滑な輸送体制を確保し、アスリートの負担を軽減する。
- 宿泊施設から競技会場まで、概ね1時間以内での輸送サービスを提供する。
- 競技の特性や輸送対象に応じて、適切な輸送サービスを提供する。

宿泊

選手団及び大会関係者に対して、競技に集中できる宿泊サービスを手配する。

- 競技会場まで概ね1時間以内にアクセスできる場所に宿泊施設を設置する。
- 各国選手団のニーズに応じて、適切な宿泊施設を複数用意し、それぞれ適正な価格にて提供する。
- 宿泊時に円滑なコミュニケーションを取れるよう、情報保障に配慮する。

飲食

大会期間において、参加する選手団等が適切に食事ができるよう支援する。

- 必要に応じて、宿泊施設や競技会場周辺の飲食施設等の情報提供を行う。
- 適切に水分補給ができるよう、競技会場及び練習会場において飲料の提供方法を検討する。
- 宿泊施設においては、多様な食文化等に配慮した飲食や情報提供に努める。

08 大会運営

医療サービス

大会期間中の選手等の傷病発生に速やかに対処するため、必要な救護体制を整える。

- 体系的な医療サービスの提供に向けた基本方針や計画を策定する。
- 救急当局や医療機関等と事前に十分な連絡調整を行い、情報保障に配慮した救護体制を構築する。
- 競技会場等に救護所を設置し、負傷者や急病人が出た際に救護を行う。また、必要な場合に、医療サービス提供を支援する。
- 保健衛生の基本的な対策を講じ、安全な公衆衛生環境の確保に努めるとともに、公衆衛生情報を適切に提供する。
- 選手等に、日本での医療に関する情報を適切に提供する(外国人患者の受入医療機関及び受診方法等に係る情報提供)。

会場警備

競技会場内において、施設所有者等と連携し、安全・安心な大会運営を提供する。

- 会場ごとのリスクに応じて、施設所有者等と連携し、選手や観客の安全を守るための効果的な警備を行う。
- 必要に応じて、手荷物検査等を実施する。

清掃/廃棄物

施設所有者等と連携し、大会運営のために必要な清掃を実施する。また、大会運営で発生した廃棄物を効果的、効率的に処理する。

- 大会運営に支障がないよう、競技会場及び練習会場を清潔に保つ。
- 廃棄物については、可能な限り、抑制(リデュース)、再使用(リユース)及び再利用(リサイクル)に取り組むなど、適正な処理を行うように努める。ごみの分別・処理は各自治体のルールに則して実施する。



TOKYO 2025
25TH SUMMER DEAFLYMPICS